

## 第3章

# 支援の実際

# 校内支援体制の実際

～生徒の長所を生かす支援のあり方～

Aさんは、小学校、中学校では特別支援学級で学んできました。本人と保護者の希望で高校に進学しましたが、通常の学級での集団生活や一斉授業による高校の学習に適應できるか、大きな不安を抱えての高校生活のスタートとなりました。Aさんを受け入れた高校では、特別な教育的ニーズのある生徒に対する生活面、学習面での全校的な支援が必要と考え、校内委員会を中心とした支援体制を整備しました。

## ●校内委員会の設置と実態の把握

### ① 校内委員会の役割

教頭、特別支援教育コーディネーター、各学年主任（3人）、教育相談係（3人、うち1人は養護教諭）、生徒指導係の9人で構成する校内委員会が設置され、この委員会を中心に、Aさんをはじめとする特別な教育的ニーズのある生徒の実態を把握した上で、個別の指導計画を作成することにしました。

校内委員会は、全職員の共通理解のもとにAさんへの支援を行うため、生徒の実態や必要とされる支援の方針・内容・方法・配慮事項等について職員会議等で周知するとともに、研修会や事例検討会を通して特別支援教育への理解を深めることにしました。また、保護者や関係機関との連携による支援体制の整備も進めていくことになりました。

### ② 入学前の情報収集

特別支援教育コーディネーターが出身中学校と連絡をとり、Aさんの中学校での状況を調査しました。また、保護者との面談を行い、家庭生活の様子や高校生活への要望を聞き取り、保護者の了解を得た上で、職員会議にAさんの生活状況や学習状況等を報告しました。



○生育歴	5歳：言語性LDの診断 小2：特別支援学級（情障）入級 中1：特別支援学級（情障）入級 中2：特別支援学級（知障）入級
○家庭環境	両親（農業）、兄、妹2人 本人の障害をよく理解し、成長を温かく見守っている。
○WISC-Ⅲ検査（13歳時）	言語性IQと動作性IQの間には明らかに大きな差がある。
○共通理解しておくこと	<b>【支援の状況】</b> 早期から支援が開始され、適切に引き継がれてきた。家庭も協力的である。 <b>【本人の特性】</b> 知的発達：平均的 認知特性：目からの情報を処理し記憶することが得意。耳からの情報を処理し記憶すること、言語理解や操作が苦手。（偏りが大きい）

## ●支援の実際

### ① 入学後の実態把握

中学校や家庭からの情報を参考にするとともに、Aさんの入学後のホームルームや授業の状況、清掃や部活動の様子など、学校生活のさまざまな場面でのAさんの実態を、全職員で観察し、そのデータを基に支援を行うことにしました。

校内委員会での情報整理の結果、Aさんは「聞く」ことに関する分野で困っている状況が明らかになりました。集団場面での口頭による指示の理解が困難で、聞き間違いや聞き逃しがあります。そのために、ホームルームでの連絡事項がうまく伝わらなかったり、授業中に集中力が途切れてしまったりすることが分かりました。

また、「書く」ことも苦手で感想文やレポートなどの課題に困っており、教科では国語や英語の理解が不足している状況が明らかになりました。

### ② 通常の授業での支援

高校では、特別な教育的ニーズのある生徒を学習集団から取り出して個別に支援を行うことは難しい場合があります。高校に入学したばかりのAさんに対する学習指導は、本人の意欲と自己肯定感等を考慮し、通常の授業での支援を行うことにしました。教科担当者はAさんの学習内容の理解度に配慮しながら、次のような支援を行いました。

#### Aさんへの学習面の支援

- 座席は本人が集中しやすい場所、外に気が向きにくく、黒板に注目しやすい場所に設置する。
- 一週間のスケジュールを掲示し、学習に見通しを持てるようにする。
- 言語指示はやさしい言葉で簡潔に、ゆっくり、はっきり伝える。
- 一度で理解できない場合は指示を繰り返す。
- 全体指導や集団指示を理解できないときは個別に伝える。
- 注意を促してから話しかける。
- 板書の際は、文字の大きさ、量、色を意識し、キーワードのみ書く。
- あらかじめ記入しやすいプリントを用意しておく。
- 絵や図、文字やモデルを補助的に用いる。
- 実際の生活場面と結びつける。
- 文章の内容を絵や図で示す。
- 作文を書くときに、写真や資料などを手がかりとして与える。
- 文章題を解くときに、キーワード（例：「あわせて」「のこりは」）に注目させる。
- 文章題の内容を絵や図で示す。
- 覚えることがらを意味づけして覚えやすくする。
- メモを活用する。
- 黒板に宿題・提出物のコーナーを設け、確認しやすくする。

### ③ 専門機関との連携

Aさんの高校入学後の生活状況とこれからの指導方法について保護者との懇談を行い、専門機関による諸検査の実施と教育相談を受けることについての了解を得ることができました。

諸検査（WISC-Ⅲの群指数）より、「言語理解」や「注意記憶」の落ち込みが激しく、聴覚認知力、ワーキングメモリー（作業記憶）の弱さが明らかになりました。一方、「知覚統合」に優れ、「処理速度」の力もあり、視覚情報を同時に処理する能力が高いことから、今後の支援にこの能力を長所として生かしていくことを検討することになりました。

#### ④ 支援会議の開催

Aさんの現状と課題を明確にし、今後の支援の方針や具体的な支援内容・方法等を検討するために、支援会議を開きました。会議の出席者は、校内の支援チーム（Aさんの正副担任，教育相談係，養護教諭，特別支援教育コーディネーターの5人で構成），専門機関の担当者とAさんの保護者です。

### 支援会議で確認されたAさんの現状と課題・支援の方針



校内の支援チーム

- 授業には落ち着いて取り組んでおり，分からないことは質問する。
- 実習などの作業を黙々とまじめにやり，頼まれたことは最後までやり遂げることができる。
- 吹奏楽部に所属し，意欲的に練習し，演奏技術も向上している。
- 集中力が切れてぼんやりしていることがある。
- 課題を「できない」と思うと取り組み方が弱くなってしまう。
- 言語理解，言語表現が苦手である。



保護者

- 高校入試を自分の目標として，努力したことが本人の成長につながった。
- 中学校とは違った，高校の授業やテストのスタイルに次第に慣れてきている。
- 分からないことを周りの人に聞けるようになった。
- 経験していないことへの戸惑いがある。
- 気持ちの乗らないこと，関心のないことには取組が弱い。
- 高校卒業後の進路に対する不安がある。



専門機関の担当者

- 意味のある視覚情報があれば，結果を予測する力，時間的な順序の認識が優れている。
- 全体をイメージする力，部分と部分の関係を予測する力，同時にいくつもの視覚情報を処理する力が優れている。
- まじめにものごとに取り組むことができる。
- 耳からの情報を処理したり覚えるのが苦手で，聞き間違いや聞き逃しがある。
- 頭に記憶（特に聴覚）を留めながら作業を効率よく進めることが苦手で，集中力が切れてしまう。
- 漢字，熟語の読み，意味理解，ことばのアクセントなどが定着するのに時間がかかる。

#### 支援の方針

- ◎本人が困っていることを周囲が理解し，得意なところをほめて伸ばしながら，苦手さを乗り越える方法を一緒に考えていく。
- ◎全体をイメージする力や視覚情報を同時に処理する力を長所として支援に生かす。
  - ・全体を踏まえた教え方をする。
  - ・全体から部分への方向性で教える。
  - ・関連性を使った教え方をする。
  - ・視覚的，運動的手がかりを重視する。
  - ・空間的，統合的要素を重視する。
- ◎学校と家庭が連携し，生活全般を通して継続的に自立に向けての態度を育てる。
- ◎青年期を迎えた本人が，自分の障害を理解し受容していくために，医療機関との連携を図る。
- ◎高校卒業後を見すえ，就労に関する学習やトレーニングを実施する。

## ●Aさんの長所を生かした支援へ移行

支援会議で確認された支援の方針をうけて、校内委員会ではこれまでの支援内容・方法を「Aさんの長所を生かす」という観点から再検討しました。課題によっては、通常の授業での支援に加えて、放課後の時間や長期休業を利用した個別指導も行うことになりました。

### ①「活動の見通し」を大切にする

視覚情報を同時に処理する力のあるAさんは、活動に取り組むにあたり、活動全体の手順や見通しが視覚的に示されることで、目的意識を持ち能動的に取り組むことができます。情報が不十分だと、「できない」と先読みしてしまい、取組が弱くなってしまいます。

#### 【支援方法】

- ・情報を伝えるときには視覚的な手がかりを一緒に提示する。
- ・作文を書く前に、作文マップや写真を活用し、かたまりとしての場面構成、構想を分かりやすくする。

### ②ことばの理解度を高める指導

視覚的な情報を処理し、記憶することの得意なAさんには、視覚的な手がかりをもとに、経験とことばが結び付くように指導することが有効です。

#### 【支援方法】

- ・学習活動における体験や実践を大切にする。
- ・視覚的な手がかりをもとにストーリーを語る。  
たとえば、デジタルカメラを利用して、撮影した写真を見ながら体験を語る。



### Aさんの1学期のふりかえり

よかった点は、先生の話最後まで聞いて、理解できたこと。そして、分からない点は質問することができた。悪かった点は、ときどき授業中に集中力が続かなかったり、課題の提出ができなかったこと。  
2学期は、提出物を決められた日に出したり、テスト勉強も計画的に進めたい。

### キーポイント

通常の学級での集団生活や一斉授業による高校の学習などへの大きな不安を抱えていたAさんですが、校内委員会を中心とした全校的な支援体制のもとで、無事に高校生活をスタートさせることができました。

校内委員会では、今後も「Aさんの得意なところを認めて伸ばしながら、苦手さを乗り越える方法を一緒に考えていく」という観点からの支援を行い、その内容と方法について継続的に検討していくことを確認しました。

### 行事等の作文を書く場合の支援

活動をしている時のビデオや写真を手がかりに出来事を思い出し、書きたいことを決める。

それらにまつわる単語や短文をカード（付箋紙）に書く。

カードを、時系列、または場面ごとに並べ作文マップを作る。

もう一度場面を振り返り、そこで思ったこと、感じたことを思い出し、単語をカードに書く。

カードを参考に助詞や動詞を補い、用紙に場面ごとに書く。場面ごとに書いた文章を段落としてつなげる。読んで見直し、誤字、脱字を修正する。

## 発達障害のある生徒への対応

～支援チームを結成し学校全体の指導で楽しい学校生活を送る～

2年前に入学した、発達障害のあるAさんは、学力はありペーパーテストはできますが、生徒・教師とのコミュニケーションが上手にできないのです。当初、学校側の指導は試行錯誤の連続でした。Aさんに対して、学校として、支援チームを結成し、職員対応マニュアルを作成して、全職員で対応してきました。現在Aさんは元気に学校生活を送っています。ここまでの指導の経緯を報告します。

### ●Aさんの行動に戸惑う日々

Aさんは学力検査（後期選抜）に合格しました。学力検査は上位の成績です。合格発表後の中学校の聞き取り調査から次のようなことが分かりました。

発達障害があり、薬を服用。はじめて行うことに対しては不安を感じ、時としてパニックを起こすことがあり、泣いたりわめいたりすることもある。

自分の障害について本人も気づきはじめています。



Aさんの入学後、他の生徒とは異なる行動が見られ戸惑うことが多くありました。

#### 【Aさんの入学後の様子】

- イ) 教師や友人とのコミュニケーションを円滑に図ることが困難である。
- ロ) 予測不能なことが続いたり、突然の日程変更に不安を抱え、情緒不安定になる。
- ハ) 時として極度の不安を感じてパニックに陥り、乱暴な言動をとる。
- ニ) 狭くて暗い場所に隠れたがる。
- ホ) 授業にきちんと出席できない。特に、体育の授業は苦手で、遅刻・欠席が多い。
- ヘ) 教師を正しい名前と呼べない。

### ●学校あげてのAさんへの支援

#### ①職員研修の充実

本校職員にとって発達障害のある生徒の対応は初めてでした。職員は、当初彼の行動にとまどいの連続でした。学校としては、Aさんが安心して高校生活を送れる居場所を確保してあげることが重要と考えました。そこで、Aさんの特性について共通理解を図るために職員研修を行いました。

#### 発達障害 職員研修会

講師 特別支援学校 教育相談専任教諭 5月・7月（2回集中実施）



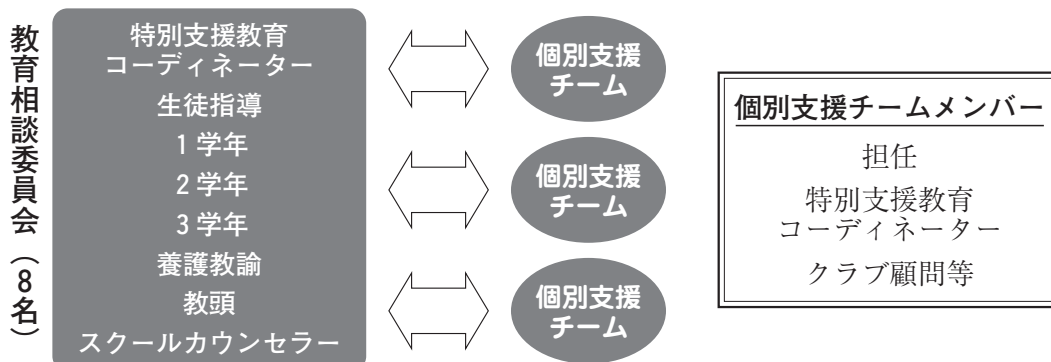
高校では、これまで多くの職員が発達障害に関する知識が不足していたため、研修会は新鮮なものでした。

Aさんのそれぞれの行動に対してとるべき具体的な対応が明確に示され、大いに参考になりました。

## ② 支援チームの結成と集団指導

本校では、発達障害のある生徒、不登校の生徒、心理面において指導・援助が必要な生徒については教育相談委員会（SNE委員会）が中心になって指導案等の作成を行います。職員研修でのアドバイスから、Aさんを指導・援助するのは担任だけでなく「個別支援チーム」で指導・援助をすることになりました。

※ S N E … Special Needs Education



## ● 試行錯誤の指導→具体的な指導 ～「学校生活の約束事」～

Aさんの行動は入学後半年たってもあまり変わりませんでした。それは学校生活をどのように送っていったらよいか、具体的に明確なルールをAさんに与えていなかったからではないかと考えました。

教育相談委員会・学年・個別支援チームでは次のような具体的な約束を文書でAさんと交わしました。Aさんが学校生活を円滑に送るために、保護者の了解を得て、職員会議でも全職員がこの約束事を確認しました。



## ☆ 「学校生活の約束事」（特別支援学校の先生の助言を受けて作成）

- 1 学校を休まず、授業に出席をします。
- 2 自分から教室に入って授業を受けます。
- 3 一人でいたい時は、先生に許可をもらって居場所を伝えます。
- 4 先生を、名前呼びます。
- 5 毎日、次の日の日課や時間割を確認します。
- 6 他人のからだに触りません。
- 7 プリントはファイルに綴じ込んで、整理しておきます。
- 8 ロッカーや机の中を整理しておきます。

※ 約束事作成のポイント 端的で分かりやすい文章にすることが大切です

「○○しません」というネガティブな表現は避ける。

「○○します」というポジティブな表現を取り入れる。

## ● 学校あげて一貫した指導を…「職員対応マニュアル」

Aさんの予想もできない言動には職員も戸惑うことが多く、職員によって対応がまちまちになっていました。そこで、指導の一貫性をもたせるために、B4判にぎっしりと、場面場面における「職員対応マニュアル」を作成し、それに基づいて対応していくことを職員会議で確認しました。

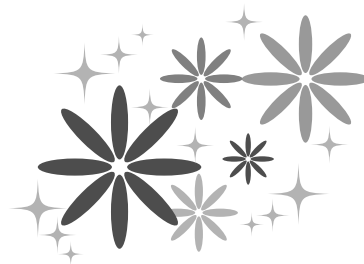
全職員の対応によって、担任の負担が軽減されたばかりでなく、学校全体でAさんをサポートする体制が整いました。



## ☆「職員対応マニュアル」(骨子)

### 【全般的な留意事項】

- ① 優しい口調で、穏やかに注意して下さい。
- ② 「駄目なことは駄目」と毅然として注意して下さい。
- ③ 曖昧な言い方ではなく、わかりやすく端的に注意して下さい。
- ④ なるべく人のいない静かな場所で注意して下さい。
- ⑤ 本人のペースに合わせて注意・指導して下さい。



### 【各場面での対応】

- ① 各教科・科目の欠課時数が多くなった時は？

本人と静かな場所で面談をし、「欠課時数が増えています。がんばって授業に出席しましょう。」と穏やかに話をして下さい。欠課が連続するような場合は担任に連絡をお願いします。

- ② 廊下でウロウロしていて教室に入って授業を受けようとししない場合は？

通りかかった先生が「教室に入って授業を受けなさい。」と穏やかに注意して下さい。それでも教室に入れない場合は、教室の前まで連れて行き、「自分でドアを開けて中に入りなさい。」と諭して下さい。さらにそれでも無理なようでしたら、ドアを開けてやり、そっと背中を押してやって下さい。



- ③ 狭いロッカーの中などに隠れようとする時は？

このような時は何か不安を抱えている場合が多いので、まずは「何か不安なことがあるのですか？」と聞いて下さい。何も返答せずにロッカーの中に入ろうとする場合は、「そこは人間が入るところではありません。決められた場所(保健室)で静かにしていなさい。」と指示して下さい。一人で行けない場合は、付き添って行って下さい。くれぐれもロッカーの中には入らないように指導して下さい。

と、こんな調子に全員が同じ指導ができるように具体的に対応策がケースバイケースで書かれています。他にも下記のような項目があります。

- ④ 先生を名前ではなく教科・科目名で呼んだ時は？ (略)
- ⑤ からだに抱きついたり、息を吹きかけてきた時は？
- ⑥ プリントの整理が乱雑な時は？

## ● Aさんへの視覚支援

5月15日(木)	
学友林+遠足	
8:30 8:45	学校集合 前庭 出発 
9:20	学友林作業開始 
11:00	牧場へ出発 
12:00	昼食 ミニ運動会 
14:00	学校へ出発 
15:00	学校到着

発達障害のある生徒は、突然のスケジュールの変更がとて苦手です。行事や短縮授業など、いつもと違うタイムテーブルで日課が進んだりするとパニックを起こしてしまう場合もあります。生徒によっては、前日に口頭で日程説明をしてもなかなか理解できない場合が多いようです。

こんな時は事前にスケジュールを視覚的に示してやるとういでしょう。例えば、左の図は学友林作業+遠足のカットを挿入した予定表です。バスの絵やミニ運動会の様子を一目で分かるように作ってあります。視覚的に指示することによって理解がより深まります。

生徒によっては、絵がなくても時間と行動の表で、すんなりと頭に入っていく場合もあります。





## ●Aさんを支える友人の力

### ① 友人関係の構築

Aさんが快適に学校生活を送るには、友人関係の構築がとても大切でした。担任が一番大切にしていたのが、彼を取り巻く友人の指導でした。

Aさんは中学校時代に友人は一人もいませんでした。クラスマッチの時にサッカーで失敗をして級友から威圧されたことを契機に、友人はこわい存在と意識していたのです。

担任は、信頼できる友人関係をつくるのが急務であると考えていましたが、友人を作る指導は中学校での体験から、Aさんにとってはたやすいものではありませんでした。

### ② 「僕のことを分かってほしい」

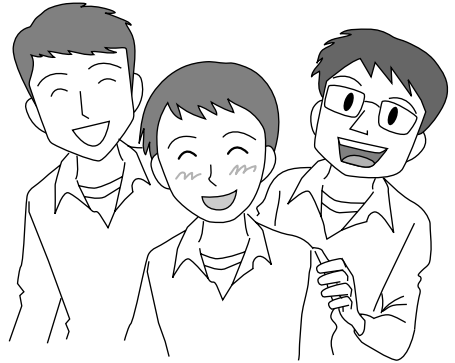
発達障害のある生徒の、風変わりとみえる行動は時としてからかい・いじめの対象になります。2学期に入ると学級でAさんといざこざが起きたり、からかいの言葉を耳にするようになりました。

関係機関の先生と相談した結果、自ら自分の特徴について学級で話をするようになりました。

障害名を告げるのではなく「僕にはこんな特徴があります。僕のことを分かってほしい。」というものでした。

このような告白は、その後どうなるか不安な側面を有しています。しかし、学級がしつとりとまとまっていたこともあり、これを境に学級全体がAさんを包み込むようになったのです。

昼休みの時間に担任の研究室にて、ルーム長をはじめ数人の級友と一緒に食事をする中で、彼を理解してくれる友人ができてきたのです。このことは彼にとって幸いでした。級友に感謝します。



### ③ ソフトボールの授業に参加できた！

Aさんは2年生に進級しました。

今は、入学時のような不安定な行動やパニック的な症状が起きることがなくなり、安定しています。日々の顔つきに、笑顔があり落ち着きが見られます。

2年の5月頃の出来事です。「Aさんがソフトボールやっているよ！」体育は苦手で見学ばかりだったのですが、友人に後押しされてはじめてバッターボックスに立ったのです。バットを振ってもなかなかボールには当たらないのですが、彼にとっては大きな進歩でした。



## キーポイント

今回の実践のポイントは第一に、「教育相談委員会」～「個別支援チーム」によって組織で対応したところです。生徒を取り巻く職員は様々な形で支援を行っています。それらの情報を収集・整理することによって、有効な支援方法が見えてくるのです。そして、何よりそのことが、担任の心の支えとなることはいまでもありません。全職員でどう支援していくかが肝要です。

第二に、職員だけの対応でなく、彼を取り巻く友人の力が絶大でした。場合によっては職員より10倍、20倍の力があるときもあります。また、「いじめ」「暴力」があるような学校では、不幸なことに障害のある生徒は高校生活の道をたたれることが多いのではないのでしょうか。そういう意味で、特別支援教育は「明るい学校づくり」と一体化したものといえます。

日々のこのような取組と努力が、学校、生徒、職員、みんなの笑顔につながります。

## “みんなで支援”の実践

### ～生徒の特性に合わせた支援ツールの活用～

Aさんの中学校からの調査書には「物事にこだわりを持ち、集団に適応しにくい面が見られ、特別支援学級で学習してきた。」という記載がありました。

高校には特別支援学級がないため通常の学級で多くの生徒とかかわりながら学校生活を送ることになります。そのため、全職員で生徒の特性と配慮を要する点を確認し、集団生活に適応していけるよう支援をしていくことになりました。

#### ●アスペルガー症候群の診断のあるAさん

Aさんの障害特性として、物事に対する独自のこだわりの他、過剰な情報を脳が取り入れてしまい、不適切に再生されてパニックになることがあります。その他にも冗談が通じず、すべて真に受け止める所があり「きもい」「うざい」などの心ない言葉は、自分が言われたのではなくても自分が言われたようにとらえ、自分が傷つけられたと記憶されてしまうなどの学校生活上の困難があります。

#### ●支援の経過

1年次 ～入学直後から支援をスタート～

入学決定後に、保護者よりAさんがアスペルガー症候群の診断があるとの話がありました。話を受け、入学前に保護者・担任・学年主任・教頭・養護教諭で支援の方向性について協議し、入学直後の職員会議で支援のポイントについて担任が説明しました。その他にも、生徒相談委員会で職員研修会を開催し、全職員が障害についての理解を深めました。また、担任はアスペルガー症候群について深く勉強し、根気よく指導しました。この担任のきめ細かい指導により1年次までは、学習面で計算方法やノートのとり方等に独特のこだわりが見られたものの、比較的適応して学校生活を送ることができました。

#### 担任が行った指導の実際

- ◇注意をするとき、教師は感情的にならないで穏やかで冷静に生徒に接する。
- ◇本人が興奮しているときは、落ち着かせる場所を提供し落ち着いてから話をする。
- ◇指示は、なるべく板書したり、メモで伝えたりする。
- ◇大切な話の場合は、本人の理解度を確認するために個別に確認する機会を設ける。
- ◇実技、実習系の授業については、集合場所や持ち物を板書する。苦手な分野はできるだけ個別に配慮をする。
- ◇家庭と連携を深め見守っていく。



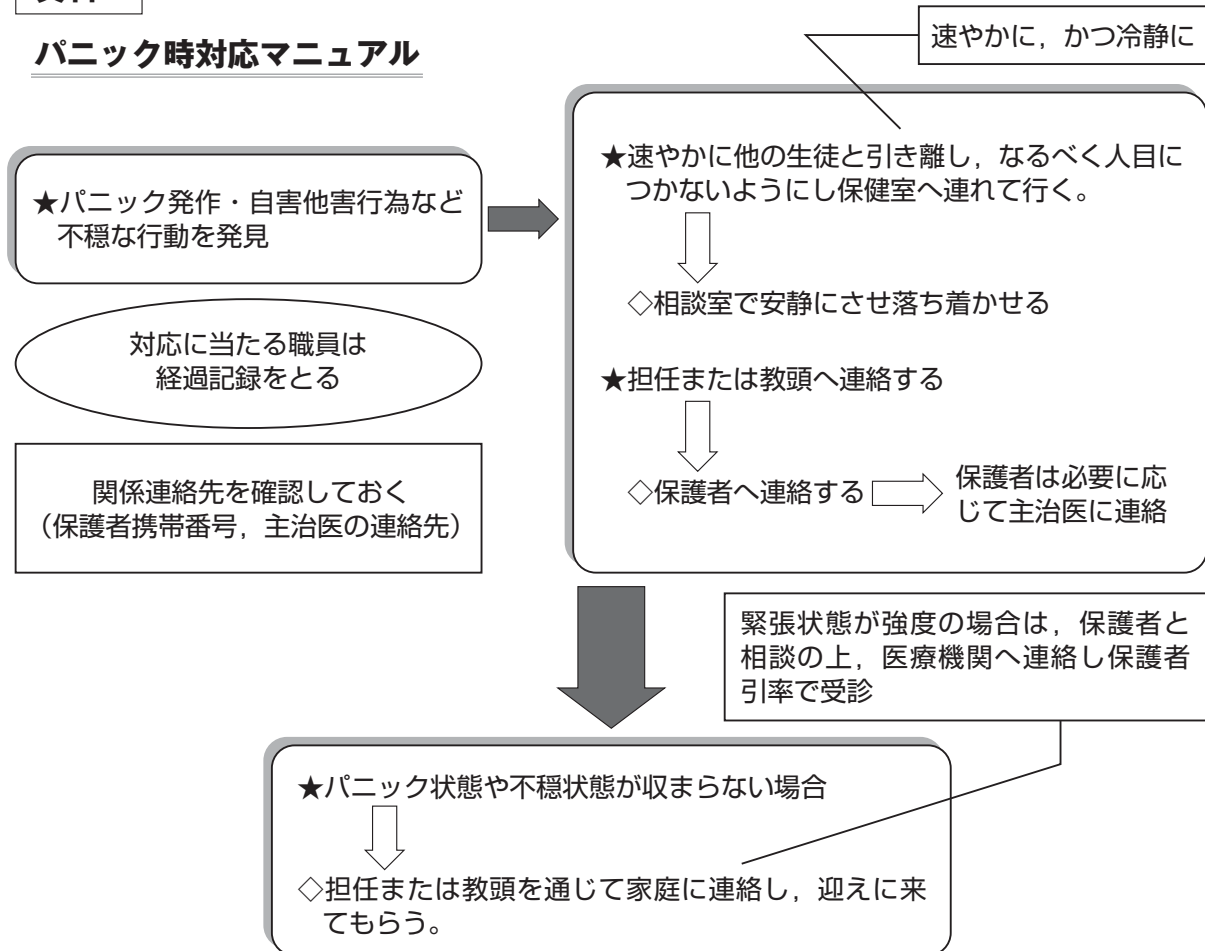
2年次 ～友人とのトラブルが増加～

2年次の春、同じ学級の生徒とのトラブルがきっかけとなり、ストレスが増幅し耐えられない状態となりました。自分の心情を訴える手段として、外部の組織や個人などへ手紙やメールを出すという行動をとるようになり、同時に自身の携帯サイトへも特定の人物を掲示して糾弾する等の行動が続きました。学校では生徒相談委員会を中心に特別支援学校の教育相談担当職員を招き、保護者・担任・

副担任・管理職で何度も支援会議を開きました。そこでは、医療機関・保護者・学校の3者が連携を取り合いながら役割分担し、社会性を育てていくための支援を続けていくことを確認しました。生徒相談委員会では、トラブルのあった生徒との関係改善と再発防止のための支援策を立て直し、緊急時に備えてパニック時対応マニュアル（資料1）を作成しました。また、社会性を育て集団適応力を向上させるという目標のもと、個別の指導計画（次ページ資料2）を作成し、全職員でかわり支えていく体制を整備しました。

## 資料1

## パニック時対応マニュアル



## 3年次 ～進路実現・卒業に向けて～

Aさんの3年次スタートにあたり進路指導を含めた支援のため、関係者が同じテーブルを囲んで支援会議を開きました。その場で主治医や特別支援学校の教育相談担当職員より、卒業後の支援も視野に入れるようアドバイスを受け、早速特別支援教育コーディネーターと、担任が地域の障害者総合支援センターを訪問し、これまでの経過について話して移行支援への協力要請をしました。その後は、生徒相談委員会を中心に毎月、「1」のつく日に関係職員で集まり、様子や経過をみて、支援や介入のタイミングをはかり卒業に向けて支援を進めることができました。また、学級の生徒にもAさんが苦手とすることについて話をしておくことで、生徒間の思いやりも生まれ、学級の生徒が徐々に落ちついた行動をとれるようになっていきました。Aさんも独特の思い込みや関心事が進路へと一本化されたためか、友人とのトラブルは減少していきました。その他に配慮した点として、保護者面談の際に特別支援教育コーディネーターが同席したり、メールでAさんの学校での様子や支援について相談をしたり、保護者との意志の疎通を大切にしながら、Aさんが必要とする支援を積み重ねました。このような積み重ねや周囲の友人・職員・保護者の支えがあって、生徒はその後1日も休まず登校し、自分が希望した専門学校への進学をする事ができました。

＝Aさんの気持ちの変化＝

1年次は、学校生活に慣れなければとの気持ちから必死の様子であり、こだわりが強く硬い表情でした。2年次になり、Aさん独自の正義感から他者を糾弾していました。ところが、周囲の生徒からは正当な正義と認められず自分の価値観とのギャップから、もがき苦しむ姿がみられました。Aさんは実直すぎる面や正義感も独自のものがあり、素直な所がある故に苦しんだ様子でした。しかし、周囲の友人・職員の理解の上、Aさんの視点に立った支援をすることにより、3年次には少しずつ落ち着きを取り戻し、精神的にも安定しました。

資料2

個別の指導計画（短期）

生徒氏名 ○○○○（○年男・女） 記入者 生徒相談委員会 ○○年○月～○月				
	目標	支援策	担当	支援の反省と課題
学習面	授業に集中して取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> <li>全体の見通しを示したうえで、指示はひとつずつ順を追って与える。重要なことや複雑なことは板書して説明する。</li> </ul>	教科担任	見通しを示す事と、変更の説明をはっきりする事をこれからも継続していく。
行動面	研究室訪問の際のマナーを身につける。	<ul style="list-style-type: none"> <li>ルールブックを作る。（①大きな声で挨拶して入室する ②都合を聞く ③用件を言う ④話したいことを書きだし、メモを見ながら話す ⑤大きな声で挨拶して退室するなど）</li> </ul>	委員会担当者	ルールブックができていないので、早急に作る。
		<ul style="list-style-type: none"> <li>ルールブック通りにできるように指導する。できたらしっかりほめる。</li> <li>教員が忙しいときは、時間の制限をしたり、別の時間を指定するなどして話を聞く時間を保障する。</li> </ul>	各研究室	職員研修によって理解が深まり、協力体制ができたことが良かった。
対人関係	嫌なことは「嫌だ」とはっきり言う。言えないときは担任に言う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>「嫌だからやめてくれ」とはっきり言うことを提案する。</li> </ul>	正副担任	本人が「嫌だ」と言える環境を整えないといけない。
	友人に手紙を書けるようにする（渡し方も含めて）。	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の気持ちを言葉で表現する練習として、日記を付けるよう勧めてみる。興味分野に偏らないよう指導する。</li> </ul>	正副担任	日記は、振り返りが苦手な本人の心情を伝える手段として適当でなかった。他の方法を考える。
	学校で困った時は、ひとりで考えないで、先生に相談する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>信頼関係を築けるように、必ず聞く姿勢を示し何らかの答えを返す。即答できないときは、期日を指定して再度訪問してもらう。</li> </ul>	全職員	相談を受けた時、本人が納得できるような対応ができていない。
生活・進路	社会性をはぐくむために他人とのコミュニケーション感覚を身につける。	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校もサポートすることを示す。職員が目にした友人からのからかいなどは、その場で注意する。</li> <li>友人との関係を改善するため、学校で相談・指導をし安心して学校生活が送れるようにする。</li> </ul>	生徒指導	友人の態度が改められたため、特定の個人に向かう苦情はなくなった。

### 卒業に向けた支援のポイント

- ◇進路情報が過多になり、パニックになるのを防止するために進路計画表（資料3）を作成し、Aさんが見通しを持つことができるよう配慮する。また、進路指導係と連携し、必要な情報を整理して計画に沿った指導をしていく。
- ◇対人エチケットが身につくよう配慮し、研究室訪問のマナーを全職員で個別指導していく。
- ◇家庭との連携はもちろん医療機関とも連携を図る。

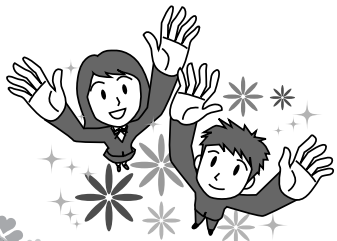
### 移行支援のポイント

- ◇発達障害のある生徒を受け入れている企業や学校について調べ、Aさんや家庭に知らせる。
- ◇家庭、医療機関と連携を密にしていく。
- ◇卒業後、社会的サポートをしてもらえるよう外部の専門機関とのつながりを持つ。
- ◇Aさんがソーシャルスキルを身につけるため、サポートブック（資料4）を作成し、支援する。

### 資料3 進路計画表

月	学校行事・検定試験	専門学校進学の手配	チェック欄
4	宿題テスト・学校見学会		
5	教科補習（秋まで継続）・1学期中間テスト・模試	必要な教科補習に参加 模試を受ける	
6	懇談週間 模試・英語検定・1学期期末テスト	教科補習に参加	
7	分野別進路ガイダンス・三者懇談	教科補習に参加	
8	漢字検定 宿題テスト・文化祭	出願書類取り寄せ オープンキャンパスへの参加	
9	模試・2学期中間テスト	書類の作成、担任へ書類の作成依頼	
10	模試・英語検定	出願書類発送	
11	模試・2学期期末テスト	面接練習・推薦入試受験	
1	学年末テスト・英語検定	一般入試受験（推薦入試不合格の場合）	

### 資料4 サポートブックの目次



- ①授業を受ける時のマナー
- ②感情や思考の表現の仕方
- ③困った時の相談の仕方
- ④余暇の過ごし方
- ⑤トラウマの解消の仕方（違う形で置き換える）
- ⑥将来の展望

### キーポイント

この事例では発達障害のある生徒について、早期に介入し支援体制を整えたことや生徒の実態に合わせ迅速に対応し、そのつど支援ツールを作成・活用したことが有効でした。

高校では、通常の学級での対応となるため、全職員で周知して接していくことや情報の共有が必要となります。問題が生じた場合は、チームを組み、その時の生徒の状況に合わせて柔軟に対応していくことはもちろん、日ごろの様子をみて気になる点や心配な点があれば、特別支援教育コーディネーターに連絡が集まるようにすると支援がしやすくスムーズです。

# 発達障害を授業で扱う

～トラブルが多い生徒の自己理解と周囲の理解～

高校生になって環境が変わり、自分のストレスをうまくことばにできず周囲に対して乱暴で威圧的な行為を何度か繰り返し、注意を受けてきたAさん。これまでの指導を見直し、Aさんの気持ちに寄り添うとともに、周囲の生徒の理解も含め集団として成長するための指導が必要になりました。

アスペルガー症候群の診断のあるAさんに対してどう自己理解を促し、また周囲の生徒への理解をどのように進めるか、保護者と学校が一体となって地域の専門機関と連携しながら考えました。

## ●友人とのトラブルが相次いだ1年次

高校入学後、小・中学校時代からかかわりのあるスクールカウンセラーが保護者の了解を得て、学校にそれまでのAさんの様子を伝えて下さいました。そのこともありAさんが最初に窓ガラスを割ったときには、結果的には「Aさんの特性から仕方のないこと」という認識で注意しました。友人とのトラブルでも、家族は他の生徒と同様の指導を望みましたが、一般的な指導ではAさん自身の理解や行動の変化にはつながらず、指導の見直しや認識の変更が必要になりました。

Aさんには心の反省を期待することより、トラブルを機会として捉え、自己理解を進めることや、社会規範や集団的ルールの中でどう行動するのかを具体的に確認する事が先決になりました。

また、一方では担任や、教科担当者、クラブ顧問が日常的にAさんのいいところを認めるように心がけました。教師と同じように周囲の生徒もAさんの特徴を肯定的に理解することで、ストレスを軽減することになりました。そうした周囲の理解が、問題を繰り返させないことにしだいにつながっていきました。

**Aさんの気持ちに寄り添えば見えてくるものがあります。**

Aさんはストレスをうまく言葉で表現できずに乱暴な行動をとってしまうので、周囲の生徒への威圧行為と判断されてしまいます。その行為にいくら明確な理由があっても、勝手な言い分と受け取られがちです。悪いことと分かっているのに、興奮すると押さえが効かないことでAさんも苦しんでいるととらえ、Aさんに寄り添い話を繰り返していきました。Aさんには小・中学校の経験から家族との約束があり、人に暴力をふるうことは決してしません。自分の特徴を体験的に理解していて、トラブルを防ぐためにはその相手との間に距離を置くことを心がけていました。しかし、周囲の協力がなければ未然に防げる事ばかりではありません。

Aさんは、自習の時間に騒がしくなることのストレスからパニックとなり、机を蹴ってしまい人に当たって怪我をさせたことがありました。好きな教科で、集中したいAさんが最も苦手とするのは周囲のガヤガヤした人の声でした。このような理由を周囲の生徒に丁寧に話すことにより理解を得ることができました。

教師がどちら側にもかかわり、パニックを未然に防ぐこと、原因を早期に取り除くことは、学級の学習環境を整えることにつながるといっても見落とされがちです。Aさんの安定に必要なことは学級が平穏であることです。そのことは周囲の生徒も体験的に理解できました。

……部活に出てこない人をいじめた奴は笑って俺に「ちよっとやり過ぎた。」と言いき、全く反省してなかったので放課後ぶっ飛ばす予定でした。それでイライラしていて仲の良い友達にちよっと言い過ぎてしまいいけんかをしてしまいました。完璧に俺が悪いです。……

……今回はまたキレてしまい壁を壊してしまいました。たくさんのことに腹を立てていました。今落ち着いて考えれば「何であんな事をしたんだろう」と思います。自分分は昔から何かやらなくちゃいけないことができなかったり、人とけんかするとキレて物や人に当たってききました。今になってもそれは直ってないんだと思います。人に当たるのは中学の時にほとんど直りました……

Aさんの作文より

本人の気持ちに寄り添えば必ず明確な原因・理由があります。

保護者の気持ちにも寄り添いながら「本人のために」の一点で一緒に考えましょう。

Aさんがトラブルを起こさないための具体的方法を理解するためには、日常的な行動の振り返りを繰り返す支援が必要です。保護者が学校に期待しているSST（ソーシャルスキルトレーニング）は、学校内で日常的に起きている小さなトラブルにつながる発言や行為を教師が観察し、機会を捉えてAさんに確認を続けることでした。保護者の要求を完全に満たすには限界がありますが、一人が背負うのではなく、教師が理解しみんなで対応することでできることが見えてきました。

育てにくかったお子さんを持つ保護者は、学校に対して警戒心を持っていることもあります。幼少時から現在に至るまでの道のりをしっかりと学校が受け止め、できることは何かを考え始めたことにより、保護者も心を開いてくれました。

学校が家庭や保護者ばかりに要求してもAさんの行動は変わらないことは明らかです。保護者の考えにも耳を傾け、こちらからもできることの提案をしながら協力の関係が作られなければ何も始められません。学校ができることを保護者と一緒に本気で考える……そして出した答えの一つが、Aさんと周囲の生徒へ向けて「発達障害」を授業で扱うということでした。

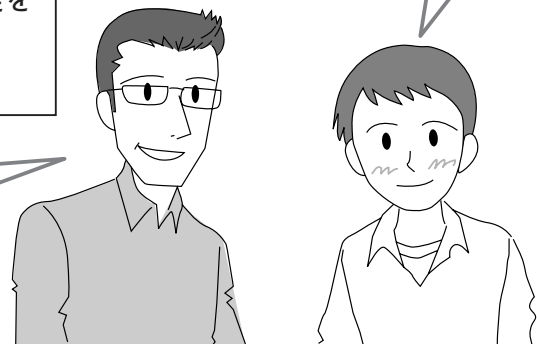
入学時からAさんの理解者として支援していたのは、Aさんの得意科目の教科担当であった、専門科の副担任でした。

日常的にクラスの様子の変化にも心を配っていました。Aさんがパニックを起こしたのは、周囲の生徒の無理解や、雰囲気にも問題があったと考え、Aさんのいいところを認める方向に周囲の生徒を導きました。

担任は割り切って役割分担をお願いしました。

得意な科目を生かして絶対に大学に入る！先生なら分かってくれる。話も素直に聞けるよ。

確かに君はすごいなあ。だけど、自分の生活に責任もてるのか？けんかしてちゃあなあ……。



## ●本人と周囲の生徒に向けて「発達障害」を授業で扱う —安定してきた2年次—

高校2年生になり、周囲の生徒には得意な科目でAさんを認める様子があり、Aさん自身には進学目標や、学級内でトラブルを起こしたくない気持ちがありました。Aさんはなぜ、すぐにキレてしまい「どうせ自分なんか・・・」となってしまうのかをAさん自身や周囲の生徒が理解して、納得することができれば、Aさんと周囲の生徒のストレスはもっと軽減できると考えました。

そこで、支援委員会では「実態把握と考察のシート」(P50)をもとに、家庭科の授業内で「発達障害」を学ぶことにより、Aさんと周囲の生徒の理解を進めることを計画しました。「子どもの発達と保育」の授業では「発達障害」を扱い、それぞれの生徒が自分を振り返ることや、セルフエスティーム(自己肯定感)を高めること、お互いを認め合う事などを学ぶことができます。しかし、生徒に「発達障害」についての学習を受け入れる力があるかどうか、個人への攻撃につながらないかどうかの見極めが非常に大切なところでした。Aさんの保護者には率直な意見をいただき、スクールカウンセラー、地域の保健師と連絡を取り合い、協力をいただくことにより授業を作り上げることができました。特定の生徒や学級のためという印象にならないように、客観的な話ができることを期待して、「家庭基礎」を学ぶすべての学級で、授業者は保健師さんに依頼しました。

### 発達障害についての理解を深める授業

教科名 「家庭基礎・保育分野」

【学習のねらい】

- (1) 「子どもの発達」と同時に「発達障害」について学び、「互いの個性」を理解し尊重することの大切さを知る。
- (2) 地域の「乳幼児健康診断」に於ける発達障害の早期発見・支援についての紹介から「子どもは社会が育てる」ことを理解して、援助の方法を知る。子どもにかかわる様々な専門職についても知り、職業観を持つ。

### 【単元展開の概要】

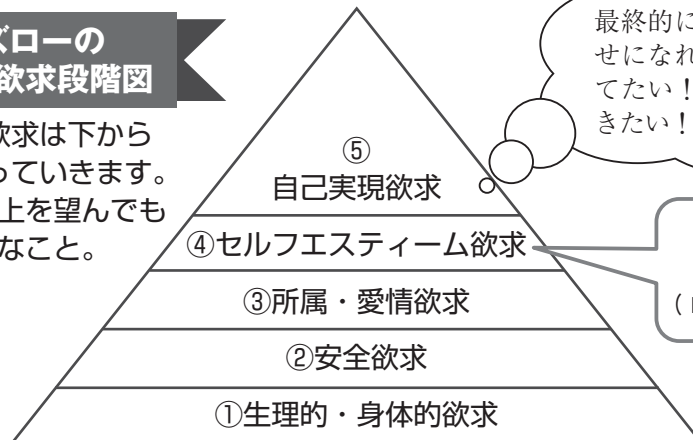
学習活動	学習内容および留意点	備考
1 お母さんと子どもは力を合わせて産まれてくる	地元の保健師から出産のお話、乳幼児健康診断の目的や概要を聞く	保健師による出前授業 資料：子どもの発達の大まかな見方 発達障害の特徴
2 乳幼児健康診断について知る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市の乳幼児健康診断について知る</li> <li>・発達障害の特徴について知る</li> <li>・得意、不得意があって当然であることを学ぶ</li> </ul>	記入：隣の人のいいところ探し。カードを隣の人へ渡す 資料：マズローの人間の欲求段階図 ※
3 自分を大切にすること、他人を大切にすること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のいいところを認める</li> <li>・自分を大切に思う気持ちが自己実現につながる事を学ぶ</li> <li>・セルフエスティーム欲求について理解する</li> <li>・子育てには父母にもセルフエスティームが必要なことを知る</li> </ul>	体験：はさみを利き手とは反対の手に持ち、紙に書いた○を切る。自己肯定感を低下させる声かけ、向上させる声かけによりどのように感じたかを体験する
4 子育て支援を考える	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お互いを認め合って社会が成り立つことを知る</li> </ul>	
5 これから社会へ出る皆さんへ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつは人間関係づくりの基本であることを知る</li> </ul>	



※

### マズローの 人間の欲求段階図

人間の欲求は下から  
積み上がっていきます。  
いきなり上を望んでも  
無理なこと。



最終的に人はここを実現することで幸  
せになれる。勉強したい！子どもを育  
てたい！だれかを大切にしたい！働  
きたい！気持ちが自然にわいてくる。

自分を大切に思う気持ちは  
人も大切にできる。  
(I am OK! You are OK!)

#### 【具体的な流れ】

- (1) Aさんの実態に配慮して、どのように授業を展開するか保護者と懇談する。
- (2) スクールカウンセラーを交え学校でできる支援について相談、検討し、保健師に依頼。
- (3) 保健師と教科担当で授業内容の相談。(原案作り)
- (4) 保護者に授業の説明をして、保護者の要求や心配などを聞きながら内容の検討。(スクールカウンセラー・教育相談担当者・保健師・教頭・養護教諭・教科担当者同席)
- (5) 生徒の様子や授業内容を、学校長・スクールカウンセラー等が確認しておくため公開授業とする。
- (6) 補足授業、感想提出。

#### 【成果と課題】

- (1) 生徒はいつもの教科担当者でないだけでも集中して取り組むことができ、「発達障害のことを初めて知った」「自分にも同じような特徴がある」「よく理解してだれでも持っているいいところを認め合いたい」等の感想があった。
- (2) マズローの図によるセルフエスティームを高める資料・説明により、それぞれの持つ「個性や特徴」「得意・不得意」について生徒は自分のこととしてとらえることができ、人に対する誹謗中傷にはならなかった。以上より学習のねらい(1)はおおむね達成できた。
- (3) ノーマライゼーションの確立、社会から援助を受けることの大切さを知ることができた。学習のねらい(2)の職業観の育成については、今後の課題として引き続き取り組む。

Aさんはその後、終業の号令で立たなかったことがあり「僕は一つのことに熱中すると、他の音が聞こえない特徴がある」とクラスメートの前で言ったため、「周りの人が教えてあげるといいね」と柔らかな空気が流れました。保護者にはこの授業の後、学校での落ち着いた状態について連絡する、うまく進学につなげるための話し合いをする、講演会のお誘いをするなど、こちらから声をかけやすくなりました。この授業がきっかけになってAさんや周囲の生徒が成長したこと、保護者が学校を信頼し安定したことを確信しました。

#### キーポイント

パニックによる問題行動が起きたら・・・Aさんが落ち着いたところで、彼なりの言い分(解釈)をじっくり聞きます。同時に危険行為についての事実確認をしておき、その後のSSTに生かします。問題を起こしたときにルールを無理矢理たたき込むことで自己肯定感の歪みを招くよりは、失敗を未然に防ぐことの方法を一緒に考えます。

生徒指導も、特別支援教育も「生徒に問題行動を繰り返させないこと」が目的の一つです。反省指導だけではなく、「周囲の生徒の理解も含め集団としてどう成長するか」を追求すれば、おのずと支援の方向性は決まってくるはずです。

## 実態把握と考察のシート

生徒氏名 ○○ ○○ (○年 男・女)

記入者氏名 ○○ ○○ ○月○日

### 生育歴・家庭環境 (担任記入)

- ・父、母、弟(中2)、弟(小5)の5人家族
- ・すぐ近くに父方の祖父母
- ・育てにくい子どもであった。
- ・泣き続け布団に寝たことがない乳幼児であった。

### 保護者の意向 (担任記入)

- ・通常の学級の中で育つことを希望してきた。
- ・本人に障害名の告知はしない。
- ・学校で職員による定期的なソーシャルスキル・トレーニングを希望する。
- ・医療につなげる意思はない。
- ・医療でなくとも効果はあると信じている。
- ・反省指導等他の生徒と分け隔てなく指導してほしいと父親は要求。

### 医学的所見 (委員会記入)

- ・小学校入学後ADHDが疑われたが、小5でアスペルガー症候群と診断 (○○病院)
- ・本人は服薬を拒否

### 日常生活の様子 (担任記入)

#### 〈教科〉

- ・数学、簿記など数字・計算が得意
- ・理科は分野により興味にばらつきがある。
- ・歴史、漢字は得意
- ・担当教諭のあげあしを取る。

#### 〈行動〉

- ・集会などは人に囲まれる感じで抵抗がある。
- ・後ろに立たれることが嫌い。
- ・思いつくことをすぐに口に出すので授業の妨げになることもある。
- ・口が悪く、空気が読めない。
- ・サッカーは好きだが、部活ではトラブルが多い。
- ・思い込みが激しく、人を責めることもある。
- ・授業をぬけても、15分以内に必ず戻る。
- 友人と話していてカッとして急に窓を割った。
- 自習中周りの話声で集中できずにドアを蹴り外に飛び出した。
- 自習中、騒がしい女子に向け椅子を蹴り女子に当たり問題となる。
- ・自転車など頻繁にいたずらをされた。
- 上履きを隠されたなど誤解して暴れる。
- ・食べ物に対してこだわりが強い。
- ・母親が学校に来ることを嫌がる。

#### 〈コミュニケーション〉

- ・些細なことでも切れやすく、物に当たりけんかになることがある。
- ・明るくだれとでも物おじせずに話す。
- ・得意な教科では授業中穏やかである。

### 総合的な考察 (委員会記入)

- ・得意な教科で認められていることが自信につながっている。大学への進学希望あり。
- ・授業中は姿勢が悪く、バランスを取っていると考えるが、他の生徒への悪影響も大きい。
- ・トラブルは自習の時間など、騒がしく本人が集中しにくい時に起きているので自習監督の配慮で回避できそうである。
- ・苦手な女子には接近しないなど、自分なりのルールがあるので確認していきたい。
- ・友人関係のトラブルはあるが憎めないところがあるので、友人は受け入れている部分もある。

### 支援の方向 (委員会記入)

- ・学校は医療につなげることや、告知することを強要できないので、家族の意見も尊重しながら共に考えていく。
  - ・学校におけるSSTは現状の体制では専門性もなく限界があることを保護者に伝える。
  - ・話のできる職員を決める。(得意科目の担当である副担任・特別支援教育コーディネーター)
- 〈授業のできることの検討〉
- ①教室での座席は窓際を避け、前から2番目にするなどして、本人にとって余計な刺激を排除する。実習教科では担当教諭の近くの座席にする。
  - ②授業では的確な指示と、簡潔な質問や説明に注意して、学習のルールを明確に示す。
  - ③授業中、パニックを起こした時には外に出ることを指示して、しつこく追わずに連絡をしてクールダウンを待つ。教室→保健室→あるいは部室→時間の経過とともに戻る。
  - ④家庭科で本人と周囲の生徒の理解のための授業を計画する。

事例

5

## 進級に向けた支援から進路指導まで

～学習支援を中心として～

高校3年生Aさんは、中学入学時、知的障害を伴う広汎性発達障害と診断されました。特別支援学校への進学を勧められましたが、保護者の希望もあり全日制普通科を受検し入学しました。入学当時、問題はありませんでした。1年生2学期頃より友人とのトラブルと授業について行けないプレッシャーで欠課と欠席が多くなりました。出席への働きかけとAさんについての、職員の共通理解に努めるとともに、学びの環境整備・保護者や外部の専門機関との連携など、Aさんの進級そして卒業に向けた支援が始まりました。

### ●Aさんの苦手なところ

着替えなどの動作がゆっくり。授業へ行くのもゆっくりでいつも遅刻してしまいます。ノートをとったり文章を書いたりするにも時間がかかります。だから、授業についていけないし、分からなくて、苦痛でたまりません。

早いテンポの授業についていけません。意味がすぐに分からないからです。

手先を使った細かい作業は苦手です。

友だちとのコミュニケーションがうまくいきません。

急な予定変更によりパニックを起こすことがあります。

こだわりが強く、すぐに考え方や行動を変えられません。

友だちや後輩から動作をまねされたり、不意に脅かされたりしてからかわれてしまいます。

友だちからの何気ないからかいを“いじめ”と感じてしまいます。一回の体験がずっと頭の中であって離れません。苦手な友だちはずっと苦手です。

Aさんは友人からの“いじめ”が原因ということで不登校傾向になりましたが、授業が分からないことや教科から出された補習課題がこなせないことなども原因とわかり、特別な支援が必要と判断されました。

また3年生になり、卒業後の進路も含めた支援の必要性も強くなりました。

### ●支援のための連携

校内支援体制の確立（特にAさんについての職員の共通理解・共通認識）と保護者・関係機関との連携を中心におき、Aさんの将来へ向けた支援を見いだすことを目標にしました。

校内支援体制  
コア支援チームを基点に



コア支援チーム

状況に応じてすぐに対応でき、機能的に活動できる。  
担任 養護教諭  
特別支援教育コーディネーター

教科担当者会議

授業等関係する職員の会議  
授業中での理解、単位修得に向けての支援 教科担当者

サポート委員会

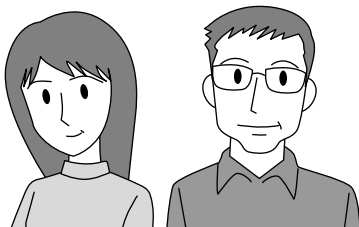
実態把握から指導方針決定まで  
学校長 教頭 特別支援教育コーディネーター  
養護教諭 生徒指導主任

学校カウンセラー

連携

連携

保護者



現状について理解と支援  
Aさんに最も適した将来を考える

連携

特別支援学校 医療機関  
障害者総合支援センターなど



特別な教育的ニーズを理解するためのアドバイス  
今後の支援方法についてのアドバイス  
社会人として自立するためのアドバイス

● Aさんの現状を把握し理解につなげる。

① 校内での情報収集

まず、コア支援チームでAさんの「困っていること」を含めた現状と支援の必要性を話し合い、教科担当者会議を開き、Aさんの現状と課題・支援の工夫を具体的に出してもらおう。

各教科・活動ごと、Aさんの授業中の様子・困っていること・やってよかった支援方法・うまくいかなかった支援方法・単位修得のためにすべきこと・これからの課題 等出し合う。

## ② 保護者からの情報収集

生育歴 家庭での様子 Aさんの現状理解について家族で一致しているか？

特別支援学校についての認識（特別支援学校に対しての抵抗がある？）

保護者としての願い，進路への希望＝全日制普通科を卒業させたい。進学させたい。

## ③ 関係機関からの情報収集（保護者の了解を取りながら連携につなげる）

特別支援学校：Aさんの「困っていること」をどのように理解したらよいか。

WISC-Ⅲ 結果の説明。

高校としてどのような支援ができるか。

スキル獲得方法のアドバイスをもらう。

医療機関：ストレスが身体症状として出てきたため精神科を受診する。

Aさんの現在の状態，内服で注意すること。

二次障害を予防するためにどうしたらよいか。

障害者総合支援センター：進路を選択する上でAさんにとって何が適しているか。

（作業療法士の派遣，社会に出るときの支援方法，療育手帳の取得等）

## ● 支援の実際

実態把握をもとに 個別の指導計画 を立てる ⇨ 職員の共通理解・共通認識へ

ここでは，主な項目を抜粋しました。

## ① 学習支援について

授業のやり方 教材の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉と同時に目に入るように表・記号・絵などを使うこと</li> <li>・ゆっくり・はっきり・短く・分かりやすく話すこと</li> <li>・板書よりプリントを用いる。ノート等に写す場合，時間を多めにとること</li> <li>・大切な箇所は，個別に確認をとること</li> <li>・集中させるように，周囲の生徒は私語を慎み，環境を整えること</li> <li>・得意な教科を伸ばすように指導することや基礎的な学習を繰り返し習得させること  <u>できたら「よくやったな」とほめる</u> ⇨ <u>自己肯定感をつけていく</u></li> </ul>
補習課題 レポート	<ul style="list-style-type: none"> <li>・負担にならないように配慮すること</li> <li>・他の生徒と同様に指導していくが，途中から個別指導を実施  <u>指導しながらできたことをほめる</u> ⇨ <u>達成感を持たせる</u></li> </ul>
再追 試	<p>最初は他の生徒と同じ内容で実施</p> <p>次からは，Aさんに合った方法・問題で実施</p>

## 【職員の共通理解事項】

他の生徒との関係で，「特別扱いしないこと」を職員間で申し合わせる。

まず，他の生徒にも見える形で同じ課題を与え指導し，その後Aさんに合った課題に切り替えて指導を実施する。

## ② 評価・進級における問題

欠席や欠課が多く、本校規定の欠課時間数をオーバーしたため、サポート委員会で「支援を必要とする生徒」と判断し、職員会議で審議した結果、欠課時間数の規定は不登校の生徒と同様とすることになりました。

評価は、上記のことを考慮に入れ、補習課題の提出状況・追試等を含め決定しました。

## ③ 周囲の生徒への理解・協力 → サポーターづくり

クラス指導	<p>「Aさんは〇〇に対してみんなより敏感なんだ」 「Aさんは〇〇がとても苦手だ」  「だからAさんは困っているんだ」  「でもみんなと同じように一生懸命なんだ」 「サポートしてあげよう」</p> <p>Aさんの行動等具体例をあげて理解を求めた ⇨ 一人でもサポーターを増やす努力</p>
個別指導	<p>Aさんが苦手とする生徒を指導 → “からかい”が“いじめ”ととらえられること  しかしAさんを見無視するのではなく、挨拶等普通に接して欲しい（本人も望む）  Aさんが困っているときに手を差し伸べることでAさんの苦手意識を変えられるかもしれない</p>

周囲の生徒への理解は、大変重要であり大変難しいことでもあります。やり方によっては逆効果になってしまいます。ホームルーム等の時間を使い、丁寧に話をしていくことが効果的と思われると思います。

## ④ 本人の発達障害に対する自覚と対応

自分が苦手なことやなぜこうなるのか等、場面ごとに自分の特徴を理解しないと二次障害へとつながるおそれがあります。Aさんの場合、ノートを持たせ、一つ一つ失敗しないスキルを記入して、自信喪失を少なくする努力をしました。また、カウンセラーによるカウンセリングでストレスを発散させる場をもちました。ゆっくりAさんにかかわる時間をとって、話を聞き、気持ちを理解することも重要です。現在、逃げ場兼居場所は保健室となっています。

## ⑤ 保護者と一緒に考える進路選択

保護者にAさんの「困っていること」に対しての理解と、今後の進路を考えるために来校していただきました。

支援会議を多いときは月に2～3回のペースで開きました。

メンバー

保護者  
 学校長・教頭・担任・養護教諭・本校特別支援教育コーディネーター  
 特別支援学校の特別支援教育コーディネーター  
 障害者総合支援センターの生活支援コーディネーター

## 【卒業後の進路選択について】

- ・療育手帳を取得して就職した方が、周囲の理解と支援を受けられるため、Aさんのためにもよいかもしれない。手帳を持った人の話を聞いてみるのもよい。
- ・就労体験をしたり、作業療法士にAさんを見ていただいたりして、どんな職業に向いているか判断してもらうことも可能である。
- ・進学を希望する場合、家から通学できるところがよく、Aさんを理解・支援してもらえるところがよい。オープンキャンパスに行って話をしてみるのもよいかもしれない。

## ●支援に当たっての今後の課題

### ① 保護者の支援の重要性

進路選択や家庭での支援等、保護者もストレスを多く抱えていると思います。保護者に対してカウンセリングを実施したり、悩みを定期的に聞いたりする等の支援が必要です。

### ② 進路の保障

高校で支援を受け卒業することはたやすいと思いますが、卒業後に支援を受けられるか・自立していくことができるか等、社会で生きていくためには多くの難題があります。

それに立ち向かうために、関係機関と連携を持ちながら、行き詰まったときの対処方法・連絡先等、本人も保護者も知っておくことがよいと思われます。また、場合によっては、進路先へも保護者・本人の了解を得ながら情報を伝え、可能な限りの支援をお願いすることも必要ではないでしょうか。

## キーポイント

特別な教育的ニーズのある生徒にとって学校は、安心して過ごせ、自己肯定感が持てる居場所があり、将来へ向けて自立できる保障がされるところであることが望ましい。一番大変なのは本人と保護者であるということを理解しながら、入学して引き受けた限りは、最後まで支援することが大切だと思います。

そのためにも校内で支援体制を整備し、まずは生徒の「困っていること」について実態を把握すること、そしてサポート委員会や教科担当者会議等で共通理解・共通認識を持ったうえで「個別の指導計画」を作成し、支援していくことが不可欠です。これらの支援は、Aさんに限らず全ての生徒に当てはまるものだと気づきました。

# 診断がされていない生徒のチーム支援

～アセスメントから実態をつかむ教師の目～

出身中学校からの情報がなかった生徒の、アセスメントから支援に結び付けるまでの流れと、そこから生まれた支援を紹介します。

アセスメントは、生徒についての情報収集からその状態像に迫るためのプロセスであり、生徒個人の能力における強い部分と弱い部分を理解することから生徒の支援につなげていく手立てとして必要なものです。

日ごろ、生徒と接する私たち「教師の目」が、気づきから支援につなげる重要なアセスメントの要素となります。

## ●チーム支援における役割分担

教頭	支援のための関係機関との連絡，調整
担任	保護者，中学校からの情報収集，日常観察，保護者への協力依頼
教科担当者	支援を必要とする生徒の情報提供
養護教諭	健康面，精神面で配慮を必要とする生徒の対応
特別支援教育コーディネーター	校内支援のための連絡調整
特別支援学校教育相談担当者	生徒，保護者へのアセスメントの実施
スクールカウンセラー	生徒，保護者支援のためのカウンセリング

## ●アセスメントから具体的支援の流れ

気づき

①「支援が必要である」と、気づくことから始まります。

Aさんが休み時間に応接室にいたとか、友人との会話が一方的など、Aさんの普段の生活から、集団生活が苦手ではないかというサインに気づいたことが、支援が始まるきっかけとなりました。

担任コメント

特別支援教育とは無縁の教職30年目に、支援の必要な新生（Aさん）の担任となりました。

特別支援教育が法的に位置づけられ、校内委員会、事例検討会、センター研修、外部専門家との連携とチーム支援に支えられての支援が始まりました。

情報収集と整理

②実態把握のための情報整理（特別支援教育委員会開催）

- ・生徒自身が困っていること、好きなこと、得意なこと
- ・生育歴、保護者が困っていることや家庭での様子

高校の様子 ⇒ チェックリスト活用による実態把握や教科担任者からの聞き取りにより学習、行動、対人面の情報を得ました。

中学の情報 ⇒ 早期情報提供のためには、義務教育との連携が課題です。



## 担任コメント

- \*授業後のホットな情報を教科担当者から得ました。
- \*学校生活のなかでAさんとの会話から何に困っているかを知りました。  
(人目が気になり、大勢の中は苦痛であり、疲れると保健室で養護教諭と話してリフレッシュすることがある。)
- \*保護者の協力が得られたことが大きかった。  
(その都度、特別支援教育コーディネーターが同席し情報を共有できました。)

## ③ 特別支援学校教育相談担当者との相談とアセスメント依頼

(教頭、特別支援教育コーディネーター)

関係機関との連携は、校内全体を把握している教頭のリーダーシップによりスムーズとなりました。特別支援学校へもすぐ連絡を取ってくれました。

地域の特別支援学校の教育相談担当者、障害者総合支援センター等、外部の専門家に支援方法等について助言をいただき、生徒のニーズに応じた支援策を計画することができました。

## ④ 個別検査実施についての本人と保護者の承諾 (担任、特別支援教育コーディネーター)

特別支援学校の教育相談担当者から、助言やアドバイスをいただきながら保護者への支援につなげることができました。外部の専門家との連携がとても心強いです！

**\*保護者への配慮がポイント！**

積極的に支援を求める保護者ばかりではないので、まずは、保護者の感じている問題をしっかり受け止めることが重要です。

(検査については、保護者の十分な理解を得て実施することが大切です。)

**\*WISC-Ⅲ検査について**

この検査の目的は生徒の得意・不得意を理解し、学習・生活面での支援に活用することです。

(WISC-Ⅲ検査についてはP21を参照)

## ⑤ 授業参観及び個別検査実施 (特別支援学校教育相談担当者)

目的は、生徒の状態像を把握するためです。

授業参観は、教科担当者の授業の工夫や生徒への伝え方等の具体的なアドバイスにつながりました。

## ⑥ 検査結果と個別相談

(特別支援学校教育相談担当者、本人、保護者、担任、特別支援教育コーディネーター)

特別支援教育コーディネーターが連絡調整を行います。

Aさんの不得意な部分をどう得意な部分でカバーするか、支援のポイントを家族とともに共通理解しました。学校や家庭での支援の方向について一緒に考えました。

検査結果に基づき、担任はすぐにイラストを使った視覚支援についての具体的な検討を始めました。

⑦ 検査結果の共通理解 (職員会議, 校内委員会)

職員間での情報交換と共通理解に基づいたチーム支援が必要です。

検査結果について、保護者の了解を得て、職員会議で議題として取り上げ、全職員が共通理解しました。

毎週定期的に生徒情報交換を行うことで、職員間の共通理解が深まり、担任の孤立を防ぎました。

⑧ 個別の指導計画作成 (校内委員会)

日常の学校生活における具体的支援方法等を考え、個別の指導計画を作成しました。

**学習環境支援**

- 机の上や身の回りの整理整頓など具体的に伝える。
- 教室内外の掲示物を精選し、落ち着ける環境を整える。

**【こんな工夫です】**

- ◆10分でも集中できるよう、黒板が見やすく指示が出しやすい座席位置。
- ◆「プリントはファイルする。」などルールをつくり、配る方法も工夫。

**自律のための支援**

- 規則や指示は具体的にし、望ましい行動を促す。
- いくつかの判断例を示し、その中から自分で考えて決定していく場面を設定する。

**【こんな工夫です】**

- ◆「今から〇〇について話す」とあらかじめ話す内容を知らせ、聞く心構えをつくるようにする。
- ◆複数の指示がある場合、指示→確認→指示→確認と、ひとつずつ消化できるようにする。
- ◆行事では、安心して活動できるように具体的な役割を与える。

**成就感の支援**

- 得意な面から、人に認められる場面や活動などを設定し、やる気を育てる。

**【こんな工夫です】**

- ◆できたときは「よくがんばった」とほめて自信をもたせ、できなかった時は、残念だったことを伝え励ます。
- ◆学習面では、本人と話し、課題の提出の仕方などを工夫する。

**見通しがもてる支援**

- 週の子定表や活動の流れなど、見通しがわかる工夫をする。
- 教師へ援助を求める時のサインの出し方を確認しておく。

**【こんな工夫です】**

- ◆イメージできず不安になることが多い学校行事は、流れを事前に伝えイメージトレーニング
- ◆生徒の困難を理解し、ゆっくり自力で取り組めるように工夫し安心感がもてるようにする。

担任コメント

Aさんは、聞き取ったことを基に思考することが苦手なので、内容理解に自信が持てるよう、文書やイラストで説明を加えるなど具体的な指導方法を職員会議に図を示して提案し、全職員にお願いしました。

試行錯誤の毎日だが、教科担当者も授業などの中で意識して対応してくれています。

## 2年目の課題

校内委員会において、支援の実際を振り返ります。

- ・生徒はどう変わり、支援内容、方法は適切だったか。
- ・情報交換や全職員の共通理解、保護者や専門機関との連携が図れたか。

## ＝ 日々かかわる担任としての教師の目 ＝

## 一歩前進！

国語の授業で百人一首を扱った。Aさんはゲーム的なものが好きなので、どんな反応を示すかと思ったが、率先して準備を手伝ってくれた。自分から入りやすそうな班に加わり、結構札を取っていた。

「今度いつやりますか？」と聞きにも来た。普段の授業では見られない姿だ。

## 苦手克服 二歩前進！！

年度末、単位認定に際して、特別レポート課題が与えられたが、当初の期限に間に合わなかった。

進級への支援として「課題の提出をさせる」との方向であったため、提出がないと単位認定はないことをいつも以上に丁寧に、そしていつになく強く話し、自分で提出日を決めさせた。かなりの分量だったので心配したが、期限ぎりぎり無事提出。その時のさわやかな顔、いつにない大きな声、できることがまた一つ増えた瞬間だった。

## 担任の我慢 一歩後退…。

新年度、教科担任が変わり、新しいやり方になじめず立ち往生。新しいことに適応できない。環境が変わり、今までできたことができなくなり、学習についても困難が見られるようになった。

## 再び一歩

「前より何ができるようになったか？」との質問に、しばらく考えて「あまり保健室に行かなくなった」という言葉が返ってきた。一歩自立に近づいたのかなと、養護教諭と話した。

Aさんは、自分で見つけてきた量販店のペット売り場でのアルバイトを1年以上続けています。最近では他の売り場に応援に行くこともあるとのこと。大勢の中にいることは苦手なのに、アルバイトが続いていることはすばらしい。身の周りの苦手なことが自分の努力と周囲の協力によって少しずつ克服できるようになっています。

今回、担任としての気負いが必要ななかったのは、校内に設置された特別支援教育委員会の中心となって、的確な「担任支援」をしてくれる特別支援教育コーディネーターの存在が大きいと実感しています。


 キーポイント

どの学校でも、学年会、教科会等の定例会の中で、生徒について話し合いが行われています。これを実際の支援に移せばよいのではないのでしょうか。

生徒の事をよく知り、かかわりが多い私たち教師の気づきがアセスメントの第一歩です。

日ごろから生徒と接する私たちの「教師の目」を大切にすることこそが支援へつながります。

チーム支援の中で重要なことは、その生徒とかかわる全職員の共通理解に基づき、その生徒にとって一番いいと思う「教師の目」で迫っていくことだと思います。

また、校内の実態把握を通して生徒理解が深まると、職員間の情報交換が活発となり、組織による対応によって、担任や保護者を孤立させないという大きな成果がありました。

# 「連携」から始まる特別支援教育

～特別支援学校のセンター的機能の活用～

アスペルガー症候群の診断があるAさんを受け入れることになった担任が、特別支援学校の教育相談員との連携を核として、校内の職員やAさんの保護者、関係機関などとも連携を図りながら支援にあたってきた取組をまとめた事例です。

担任は発達障害についての知識がほとんどなく、不安な気持ちで4月をスタートしました。1年間、Aさんにかかわる全職員が共通理解を図りながら支援を行うことで、発達障害のある生徒に対する理解が進み、校内の支援体制ができてきました。

## ●初期の対応＜4・5月＞

Aさんは授業中、大きな声で独り言を言ったり先生の言葉尻をとらえてダジャレを言ったりすることがしばしばありました。学級内の生徒たちから「うるさい」「集中できない」等の声が聞かれ始め、困った担任は養護教諭から紹介された特別支援学校の教育相談員（以下相談員と表記）に相談を持ちかけました。



特別支援学校 教育相談員

担任は、「Aさんは緊張が強くなると独り言が多くなるのではないか」ということを相談員から聞き、Aさんの座席を前の壁側に移しました。また、Aさんに授業中はなるべく独り言をがまんするように話し、時々息抜きのための時間を認めていくことにしました。

### 構成的グループエンカウンター

学級やグループ内の心と心のふれあいを促進する目的で、ファシリテーター（リーダー）が中心となってエクササイズを行ったり課題を行ったりする。エクササイズのねらいには「自己理解」「他者理解」「自己受容」「信頼体験」「感受性の促進」「自己主張」があり、エクササイズの後のシェアリング（感情の分かち合い）が重要視される。國分康孝氏が提唱。

担任は、Aさんを受け入れられるような学級集団をつくりたいと願い、ロングホームルームの時間を利用して構成的グループエンカウンターなどを実施しました。Aさんの保護者の了解を得た上で、Aさんが人の名前と顔を覚えることがとても苦手だということや自分の思い通りというような障害の特性をこの時間を使って他の

にならないと大きな声で怒ってしまうことがある、生徒たちに伝えていきました。

5月の終わりには、校内の教育相談係の提案で、地域の障害者総合支援センターの療育コーディネーターと教育相談員を講師に招いて、発達障害の理解と支援についての職員研修会を行いました。

日ごろのAさんとのかわりの中で困ったり悩んだりしていることを熱心に質問する先生方の姿が見られました。



障害者総合支援センター  
療育コーディネーター

### 障害者総合支援センター

障害があつたり生活上の困難があつたりする人たちが地域で安心して生活できるように、保健・福祉サービス利用にかかわる援助や就業に関する相談、その他生活全般に関する相談支援を無料で行っている機関。県内には保健所がある10の圏域に設置されている。名称等一部異なるところはあるが、療育コーディネーターや相談支援専門員、生活支援ワーカー、就業支援ワーカーなどの専門職員が面接・電話・訪問などで相談や支援に応じてくれる。

## ●Aさんを受け入れる集団をつくるための「対人関係ゲーム」の実施<5月>

計画的な構成的グループエンカウターの実施により学級内の雰囲気はよくなりましたが、担任はAさんが何となく集団に馴染めず浮いてしまっているような印象を抱いていました。また、Aさんを含め、授業中自分の気持ちを伝えたり人の話を聴いたりすることが苦手な男子が数人いることも気がかりでした。

そこで、相談員に依頼して「聴く」「話す」といったコミュニケーションの基本的なスキルを高めることを意識した対人関係ゲームを実施することにしました。

体を動かしながら活動をすることで、楽しそうに友だちと話したり話を聴いたりするAさんの姿が見られました。

### 対人関係ゲーム

人と人をつなぎ、豊かな集団を実現するカウンセリング技法。集団に入りにくい人を援助の中心とするとともに、その人を受け入れる集団の発達をめざしている。人と人との楽しいふれあい体験そのものを大切に考える。田上不二夫氏が提唱。

## ●教科担当者会によるAさんへの共通理解と対応<6月>



Aさんの教科担当者

職員研修会をきっかけに、担任はAさんにかかわる職員が共通理解の上、同一歩調で支援にあたることが大切だと考え、Aさんが所属する学級の教科担当者会を開くことにしました。相談員にも参加を依頼し助言を求めました。

担任の教科は数学です。Aさんは数学を得意としており、授業中も時間いっぱい問題を解くなど意欲的に取り組んでいますが、苦手とする英語や社会の時間には読書をしていたりフードをかぶって寝てしまったりすることがわかりました。また、提出物も数学は期限を守って出すのですが、その他の教科ではほとんど出していないこともわかりました。

音楽では周囲の生徒にはお構いなしに大声を出して歌うので他の生徒が不快な思いをしていたり、家庭科では1人でミシンがけができず先生を独占したり、体育ではペアを組む相手が見つから

なかったりするなど、様々な困難点が出されました。

相談員からは、次のような具体的な指導方法を聞くことができました。

- ①読書や居眠りを始めたら今やるべきことを伝える。
- ②提出物は手順をメモやノートに箇条書きにして教え、何をどのようにやってくればいいのか分かるようにする。
- ③大声を出してしまうときには「もう少し小さい声で歌おうね」というような曖昧な表現ではなく「今のボリュームは20くらいだから、10くらいで歌えるといいね」というように具体的な数字などを使って言い表すとイメージしやすい。

### アスペルガー症候群(広汎性発達障害)のある生徒の認知の特性

発達障害のある生徒は、得意な教科と苦手な教科がはっきりしていることが少なくありません。高等学校では単位を修得しないと進級できないので、苦手教科の克服が課題となってきます。見通しをもって計画を立て、実行することができにくいので、提出物の仕上げ方やテスト勉強の方法などは、目に見える形で具体的に提示していくことがよいでしょう。LD(学習障害)が並存する場合も多いので、発達検査に基づいた正確なアセスメントをすることも大切です。また、発達障害があると感情のコントロールの未熟さや不器用さが見られることも多くあります。ただ注意するのではなく、具体的な表現でやり方を教えていくことがよいでしょう。

## ●家庭との連携による支援<7月>

苦手教科の克服には家庭の協力も欠かせないと考えた担任は、相談員も含めて保護者との懇談の機会を設けることにしました。Aさんの学校では7月に三者懇談が計画されており、その場でAさんにどのようなことを伝えていけばいいのかを明確にする目的もありました。

Aさんの生い立ちなどを聞く中で、母親が悩んだり戸惑ったりしながらAさんを育ててきたことや、希望する高校に入学したものの進級できるのか、卒業後の進路をどうしていけばいいのかなど、不安はつきないようでした。



Aさんの保護者

### WISC-Ⅲ知能検査

代表的な個別式知能検査の一つ。5歳から16歳11ヶ月の児童生徒の知的発達状態を調べることができる。知能指数を言語性(VIQ)と動作性(PIQ)で表し、聴覚的な情報と視覚的な情報のどちらが理解しやすいのか個人内差を測定する。また、群指数により認知方法の得意・不得意がわかり、学習や行動、対人関係の特徴を分析する基となる。

進級については、今後家庭と協力しながら補習や課題の提出などをがんばらせることを確認しました。卒業後の進路については、相談員から障害者総合支援センターを紹介してもらい、在学中からつながっておくことが大切だというアドバイスを受けました。そして、Aさんの認知の特性を詳しく探り、効果的な学習方法を見出すためにWISC-Ⅲ知能検査を実施してみたらどうかという相談員からの提案により、Aさんは検査を受けることとなりました。

(WISC-Ⅲ知能検査についてはP21も参照してください。)

夏休みに入り、相談員がAさんの知能検査を実施しました。短期的な視覚記憶が弱いことから英単語や漢字が覚えられないことが推測されましたが、知的な認知レベルは標準以上あり、特に言語理解がいいことから、視覚記憶の苦手さを言語によって補うといった指導方法が有効ではないかと思われました。

## ●校内の支援体制を利用した障害を理解するための授業の実施<10月>

文化祭が終わった9月の末ごろから、一部男子によるAさんへのからかいが始まりました。始めのうちは気にも止めない様子のAさんでしたが、からかいがエスカレートしてきたこともあり、10月に入ったころ耐え切れなくなったAさんが、その男子に机を投げつけるという事件が起きました。担任は、Aさんがからかわれていたことを察知できずにいたことをとても残念にまた悲しく思いました。しかし、からかってしまった男子に話を聞いたところ、周囲の生徒たちもAさんの度重なる独り言やダジャレ、相手意識のない言動に耐え切れなくなっているということを知りました。

担任は校内委員会の先生方やAさんの保護者と話し合い、学級の生徒たちにAさんの障害を理解してもらうための授業を実施しようと決めました。

担任はまず、周囲の生徒たちがAさんに対して何が不満なのか、どうしてほしいのか、どんなことを知りたいのか、言い分をひたすら肯定的に聞き入れました。

その後、発達障害についての研修を何度か受けたことがあり、生徒の様子もよく知っている養護教諭に障害を理解するための授業を実施してもらいました。

この授業を通して、学級の大部分の生徒の理解を得ることができました。



養護教諭

### ＝周囲の生徒の自己肯定感も必要＝

授業実施後、Aさんの障害についてどうしても納得できなかった生徒が数人いましたが、ほとんどの生徒が理解を示し、自分でできそうなかかわり方について考え始めました。納得できないと言っていた生徒たちは、Aさん以外の生徒に対してもうまくコミュニケーションがとれなかったり、問題行動が見られたりしました。担任は、障害のある友だちを受け入れるためには、受け入れる側の自己肯定感も必要なのだということに気がつきました。

### ●進級のための補習の実施＜2・3月＞

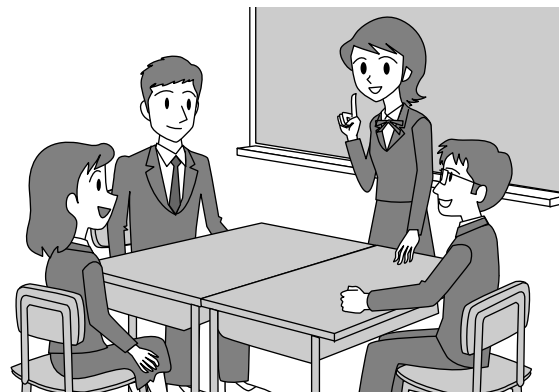
3学期に入り、落ち着いた生活を送れるようになったAさんですが、苦手教科の英語では、相変わらず点数が取れず課題の提出もできないでいました。このままでは英語の単位がもらえないと心配した担任は、英語の担当者と相談して早めに補習を始めることにしました。

校内委員会で検討した結果、発達障害があるという理由で課題を他の生徒と違う内容にしたり基準を下げたりすることはやめ、同じ課題に取り組ませることとなりました。他の生徒と異なる点は少し早めに補習を開始したことや、Aさんの「視覚記憶は苦手だが言語理解がいい」という特性を生かし、具体的にやり方を教え、始業前や授業の後を使って必ず担任か教科担当者が付き添って課題に取り組ませた点でした。Aさんは何とか課題を終わらせ、無事に2年生に進級することができました。

### ●2年生になって＜4月＞

担任は、Aさんの障害を理解するための授業をもう少し早い時期にやるべきだったのか、また、取り立ててAさんの障害を周囲の生徒に知らせなくてもよかったのではないかと、今も悩んでいるということを語っています。

しかし、2年生になりさらに生き生きと高校生活を楽しんでいるAさんの姿や、修学旅行に向けた学習の中で、「オレ、Aと同じグループでいいよ」と言ってくる数人の男子生徒の様子をとてもうれしい気持ちで眺めています。



Aさんの学級

### ◆ポイント

Aさんの担任は発達障害についての知識がほとんどなかったので、「1年間本当に手探りでした」と語っていました。

Aさんが2年生になるまでに、担任は特別支援学校の教育相談員をはじめとして、校内の職員や保護者、地域の障害者総合支援センターのコーディネーターなど多くの人たちと連携を図ってきました。そして、Aさんが卒業するまで、また卒業してからもこの連携は必要なものとなってくるでしょう。

新年度を迎え、今年もまた発達障害のある生徒が入学してきました。学級のよい雰囲気づくりや一人一人の生徒の自己肯定感を高めるための授業、苦手教科への対応など、今年は全職員が早め早めに対応しています。昨年度担任を中心として、多くの人がAさんにかかわってきた結果、特別支援教育の校内支援体制ができ上がってきているのだと感じます。

周囲の生徒の障害に対する理解や単位修得の問題、就職に向けてなど課題は山積していますが、連携しながら、まず一步を踏み出すことの大切さを教えてもらいました。

# 専門機関と連携した支援会議の実践

～特別支援学校への相談から就労へとつなげる～

SC（スクールカウンセラー）からの紹介と同時期に教頭からも、特別支援学校の相談業務についての説明があり、地域の特別支援学校の特別支援教育コーディネーターに相談し、支援を進めることができた事例です。高校では、発達障害のある、困っている生徒の存在があってはじめて、その対応に迫られ、試行錯誤しているのが現状です。「ちょっと変わっているな」程度で済まされてきた生徒でも、その特性を理解し、支援をすることによって、もっと輝きを増したのではないかと振り返る昨今です。

## ●支援を必要とする生徒の状況

### 1 Aさんの様子（高校3年生）

#### （1）担任より

Aさんは前期選抜での入学で、面接でも特に問題にならず合格し、中学校からも「やや多動」としか知らされていませんでした。

高校1年次の5月頃…… 踊ったり声を上げたりと目立つようになり、SC（スクールカウンセラー）に相談しました。

高校1年次の冬頃…… 中学校時代にもみられた、特定の教師に対する興奮が見られるようになりました。雰囲気も独特な生徒で、卒業後の進路を考えると専門機関につなげる必要があると思いました。

成績は、特に高いわけでも低いわけでもありません。2年生になり、読めないほどではありませんが、入学直後には見られなかった、字がまとまらないような書き方をするようになりました。

友人はなく、周囲は「こういう人だから」で済ましている雰囲気があります。トラブルはなく、学校生活の中では困ることなく過ごせているのが現状です。

#### （2）保健師より

乳幼児のころから心配があり臨床心理士さんにかかわってもらっていました。家庭環境的なものから、早く集団生活に入った方がいいと判断し、保育園に早く入園しました。育児は全て父中心で関係も母より父の方が濃く、父に保育士、保健師から育児についてアドバイスしてきました。

登校時のAさんの様子をみかけ、中学校時代と同じ状況が高校まで続いていると気になっていました。

### 2 連携に至るまでの経緯

#### （1）高校1年次

##### ア 5月

特異な行動が目立ち、SCに担任、学年主任、養護教諭で相談しました。その結果、「学校で困っていること」「卒業後の進路のことを考えると非常に大変であること」の2点を保護者に伝えていくという方針が出されました。さらに、児童相談所、精神保健福祉センター等の外部の専門機関につなげていこうということになりました。

##### イ 6月

職員研修（「発達障害についての理解と支援」）で来校する指導主事に、1時間早く来校してもらい、1年生の除草作業の様子を見てもらいました。その結果、「ウーッ」と声をあげたり、独り言等の行動が観察され、自閉症の疑いがあるのではという見解をいただきました。



## ウ 12月以降

年が明けるころより、ある特定の男性教諭に対して、感情を抑えきれず、ストーカー行為とも呼べる行為が激しくなり、担任、男性教諭とSCとで面談をしました。その結果、自閉症の疑いがあるので専門機関と相談したほうが良いという判断をいただきました。今後はSCを交えて両親と面談を進めていく方針を決めました。また、学年末の通知票の担任からのコメントには、「2年になったら卒業後の進路について話し合ひましょう。」と記載しました。

後日、SCから連絡があり、支援会議のメンバーとして、地域の特別支援学校の特別支援教育コーディネーター、出身小学校の特別支援教育担当の先生、精神保健福祉センターのSCに連絡しておいてくださるということでした。

## (2) 高校2年次

## ア 5月

地域の特別支援学校の特別支援教育コーディネーターが来校してくださいました。Aさんの妹(小4)の支援のため父と面識があり、中学校時代からAさんへの支援も必要ではないかと考えておられたようです。しかし、中学校の校長先生の助言があり、本人への直接的な支援は行っておらず、今後ネットワークを構築した上で連絡してくださるということでした。

## イ 医療機関の受診

地域の特別支援学校の特別支援教育コーディネーターが、妹のことで父と会う機会が度々あり、その都度、姉も受診したほうがよいという点、療育手帳を取れるなら取っておいた方がよいという点を父に話をしてくださり、その結果、2回の医療機関の受診につながりました。

## (ア) 8月

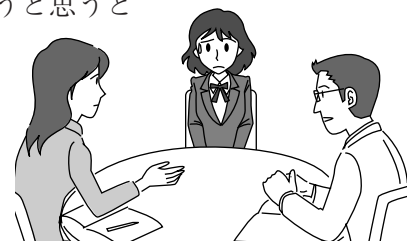
地域の医療機関の小児科医に受診し、以下の診断を受けました。

- a 「広汎性発達障害の疑い」があるが、確定診断ではありません。診断名のつきにくい子であり、精神科の医師へつなげることにしましょう。
- b 受診時には緊張の様子がありました。好きな俳優の話題では興奮もみられました。不思議な雰囲気を持った子という印象です。
- c 今まで友人とのトラブルがなかったのは友人関係がなかったからだと思います。

## (イ) 10月

地域の医療福祉センターで精神科医に受診。以下が診察の様子のご概略です。

- ・ 本人の様子 Dr「何のためにここに来たの？」 Aさん「治療のため」  
Dr「どんな症状があるの？」 Aさん「異常な癖。走り回ったり踊ったり」  
→ 自分の状態を自分で理解できているかもしれない。  
好きな俳優の話題で興奮。Aさん「言おうと思うとうまく言えずに興奮しちゃう」
- ・ 診断名はまだ確定できない。



## ●支援会議の開催

## 1 第1回支援会議(2年生10月)

## 経緯・目的

地域の特別支援学校の特別支援教育コーディネーターから、Aさんの妹(小4)への支援のかかわりの中でAさんの様子についての情報が入るようになり、次の点が確認できました。

- ・ 今までは専門機関や福祉にかかわりにくい状況であった点。
- ・ Aさんの高校卒業後も支援が必要な家庭環境にある点。

関係者が集まり情報交換をする中で、支援体制のネットワーク構築のきっかけになればという思いから、第1回支援会議の開催につながりました。

メンバー	<p>地域の特別支援学校の特別支援教育コーディネーター                  地域の医療福祉センターの職員                  地域活動センターの療育コーディネーター                  町役場（住民課福祉係長，福祉係，保健師）                  担任，養護教諭</p> <p style="text-align: right;">計8人</p>
概要  (各専門の立場からの意見)	<p>療育コーディネーター</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・医療機関にかかったのは良かったと思います。自分で自分の状態を認知していくことにもつながっています。いろいろなサービスや助けがあるという情報を知ることから連携を広げていくことができます。</li> <li>・まだ必要になるか分かりませんが，療育手帳があると市町村のサービス，福祉就労が受けられます。そういう情報も持っているといいと思います。</li> <li>・就労支援につなげていくかどうか，就業支援ワーカーと連携していくのもいいと思います。一緒に考えてもらえます。必要なら声をかけてもらえばすぐつなげることもできます。</li> <li>・今は本人と父が状況を認識していくことが重要です。認識できたことで将来福祉のサービスにつながればいいと思います。</li> <li>・肝心の時は精神保健福祉センターのカウンセリングを利用するのもいいと思います。選択肢を沢山もっているといいと思います。</li> </ul> <p>保健師</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭のこと，衣食住について基本的に生活していく力が身についていない可能性があり心配です。この家庭・生活全体を支える必要があると思います。</li> <li>→父への支援（家事介助：社協等）を広げるのも一つの手です。福祉サービスを受けることで家庭の風通しは良くなります。妹の療育援助からという方法もあります。</li> </ul> <p>地域の特別支援学校の特別支援教育コーディネーター</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高校3年生の時期を目安に支援計画を考えましょう。今からこの状況が分かっていたら対応はとれます。今後は，私を通さなくても必要があれば，互いに連携をとってもらい，支援を考えていってもらえればいいと思います。</li> </ul>

2 第2回支援会議（2年生2月）

経緯・目的	<p>地域の特別支援学校の特別支援教育コーディネーターより担任に「Aさんの検査（WISC-Ⅲ）の結果が出ました。知的障害があることが分かりました。詳しいことは次回の受診で医師よりAさんと父に説明があります。今後は，療育手帳の取得や就労支援（福祉就労）を考えていくことになると思いますが，父もすぐにはAさんの障害を受け止めることは難しいでしょうから，ワンクッションをおく意味でも支援会議を持って，今後の支援を考えていきたい。」との連絡があり第2回支援会議を開催しました。</p>
メンバー	<p>地域の特別支援学校の特別支援教育コーディネーター                  地域の医療福祉センターの職員                  保護者（父） 担任，養護教諭，教頭</p> <p style="text-align: right;">計6人</p>
概要	<p>保護者や本人の不安や思いをじっくりと聞きました。その結果，以下の具体的な方針が出されました。</p> <p>ア 児童相談所への相談のハードルから下げていく。</p> <p>本人の抵抗や気持ちの負担を小さくして児童相談所のいいところだけ利用したい。まず，児童相談所にもいろいろな役割があってマイナスイメージの部分だけでないことを本人に知ってもらう。「やわらかく」つなげたい。話しやすいスタッフも沢山いる。児童相談所へは，父からの説明がなくてもいいように検査結果等，こちらから必ず伝えておくようにする。</p>

概要	<p>イ 就職については、ジョブコーチを活用することも考える。</p> <p>「安心だな」「良いこともあるみたいだな」ということを本人に伝えていく。</p> <p>ウ 次回の会議では、児童相談所の療育手帳の審議担当者と地域活動センターの療育コーディネーターにも参加いただき、本人とも顔見知りになってもらい、相談への抵抗を減らしていく。</p>
----	---

### 3 第3回支援会議（2年生3月）

経緯・目的	<p>父が、療育手帳の申請手続きを行ないます。その流れをくみながら、本人の今後の進路について、父が「ほっ」とできる情報収集の場にできればと思い、第3回支援会議を開催しました。</p> <p>本人…療育手帳取得のための面接を児童相談所の担当者と応接室にて実施しました。（担任立会い）</p> <p>父 …会議室において、今後の本人の進路選択に向けての就労支援サービス等について療育コーディネーターより説明を受けました。</p>
メンバー	<p>地域の特別支援学校の特別支援教育コーディネーター， 地域活動センターの療育コーディネーター，児童相談所の担当者 保護者（父），本人，学校より4人</p> <p style="text-align: right;">計9人</p>
概要	<p>就労支援について、保護者の疑問に答える形で進められました。その結果、これからは、「学校の進路指導+いろいろなサービス」でいくという方向性が出されました。職場の人間関係の相談等、だれかがついていてくれると安心であり、高校卒業後、就職してからも何でも相談に乗ってくれる人がいてくれると安心のもとになるという思いから、少しずつ、ゆっくりとそういう人たちとつながっていくということになりました。</p>

### 4 第4回支援会議（3年生6月）

目的	<p>3年生になり、卒業後の進路について、支援をどうしていくかという内容の会議となりました。</p>
メンバー	<p>地域の特別支援学校の特別支援教育コーディネーターおよび教育相談担当， 保護者（父），学校より4人</p> <p style="text-align: right;">計7人</p>
概要	<p>7月から就労支援を開始するということが確認され、「学校の進路指導+いろいろなサービス」という方向性が再確認されました。</p>

Aさんは、8月には就職希望先の企業見学に行き、そして、入社試験を経て、その企業に就職が内定しました。この進路実現には、高校の進路指導係（就職担当）が常にアンテナを高くし、障害のある生徒に対しての企業の雇用情報を収集する中で、実現した成功例であります。

#### ポイント

この事例の生徒は、特別支援学校の特別支援教育コーディネーターにイニシアチブをとっていただき、専門機関と連携する中で、3月に療育手帳を手にし、就労に向けての支援を行うことができました。本人や家族への支援に対しては、専門機関との連携によって、つながる先が非常に多くなり、学校関係者として大いに助かりました。連携マップは支援体制として、どこの高校でも掲載していますが、絵に書いた餅で終わらせず、実際に連携してみることが非常に大切であり、抱え込んでいた負担も減っていくと思われれます。また、連携したからといって、連携先にすべて丸投げをすればいいというものではなく、たとえば進路指導に関しては、高校の進路指導係（就職担当）が中心となって、ハローワークや就労支援サービスを提供している専門機関の力を借りて、生徒の進路実現へとつなげていくものだということを忘れてはなりません。

## 療育手帳を取得しての就職

～障害者枠での採用をめざした支援～

自閉傾向のある定時制4年生Aさんが、卒業後の就職を考えなければならない時期になりました。担任がスクールカウンセラーや保護者、本人との話し合いを重ねる中で、療育手帳を取得して障害者枠での採用をめざすことになりました。そして、全職員が分担して履歴書の作成、面接の練習、手先作業の訓練等の指導を行い、企業に就職することができました。

### ◇支援までの経過

#### ●本人の状況

一人っ子で、素直な性格です。新たなことへの挑戦はやや苦手で、細かな作業も不得意ですが、3年から高野豆腐の袋詰め作業のアルバイトをしていました。卒業後は地元で働きたいと思っていました。

#### ●家庭の状況

母と二人暮らしで、その母が手術を受けることになり、手術が決まるまでは、Aさんの進路はあまり考えられない状態でした。またAさんの状況についての認識はありましたが、それほど真剣には考えていなかった様子でした。

#### ●担任の願い

Aさんの状況から判断すると、自立して生きていくためには、療育手帳の取得が望ましいと思っていました。スクールカウンセラーと相談し、どのようにしたら母やAさんに納得してもらえるだろうかと、時期や機会を考えていました。

#### ●療育手帳の取得

療育手帳を取得することに初めは消極的だった母に、担任から「Aさんの今後の進路（就職先）について、療育手帳を取得して障害者枠での就職を目指すことも含めて、本人にとってよりよい将来について一緒に考えましょう。」と理解を促すように話しました。母は、「療育手帳を取ることが、差別になるのではないか？」と心配していましたが、スクールカウンセラーから、就職先でのメリットや社会に出てから福祉援助が受けられる等の説明を受け、納得しました。Aさんは、W A I S - Ⅲ検査を受け、その結果に基づき市の障害福祉課へ申請して「療育手帳」を取得することができました。

（W A I S - Ⅲは、W I S C - Ⅲの大人版で、適用年齢は16才から89才です。）

### ◇就職に向けての具体的な支援

#### ●就職説明会に参加

ハローワーク主催の障害者支援の就職説明会にAさん、母と担任が参加しました。しかし実際には身体障害者枠は多いものの療育手帳枠は、ほとんどありませんでした。そこでその場で担任がある会社に、療育手帳枠での採用を直接お願いして、検討していただくことになりました。後日、その会社に担任が訪問して再度お願いをして就業体験を受けられることになりました。

#### ●Aさんの準備

同級生が就職試験の準備を始めた頃、まだ就職先は決まっていませんでしたが、みんなと同じように面接の練習や、履歴書の下書きをはじめました。

授業の始まる前に個別指導の時間をとり、手先の訓練として、ぬりえ・折り紙・はとめ・ひも結び・紙切り…などを毎日練習するようにしました。

### ●履歴書作成

文字を下線にそろえて書く練習をしました。

○印の中に書く練習、清書、下書きなしで書けるまで指導をしました。

写真撮影の際の服装についても具体的に細かく指導しました。

### ●面接の練習

入退室、受け答え、態度について、また言葉遣いなどを、放課後全職員が分担して具体的に指導しました。

服装についても細かく指導しました。

### ●就業体験

就業体験で実際に作る実習部品（組立部品）を企業から借りてきて、その部品を作り完成させる練習をしました。

手先の訓練のために、はさみを使う練習もしました。はじめはうまく使えませんでした。だんだん上手になってきました。本人も頑張る気持ちがあり、繰り返し何度も根気よく練習しました。

実習直前まで毎日、部品組立・はさみの練習を全職員が分担して指導しました。

また、ラジオペンチはなかなかうまく使えなかったため、ペンチの真ん中に穴をあけ、その穴にバネを手で入れ、部品に移すという方法を考え実施し、組立部品を作りあげることになりました。

## 3 日間企業体験実習を実施

朝8時30分から午後4時まで実習しました。

朝、担任、副担任が交代で会社に行き、1時間位実習に付き添いました。

実習終了後 企業にお礼状を副担任と一緒に作成し、送付しました。

その後担任・母親が企業訪問をして、試験日が決まりました。

### Aさんの感想

同級生全員の進路が決まっていたので、気持ちが少しあせっていました。事前の練習や面接の練習は、できないことが多かったので心配でしたが、やっていくうちにできるようになり、頑張れたのがよかったです。企業体験実習は、事前の訓練が役にたちました。量的には、3日目が一番組立部品を作れました。会社の人たちは、親切でやさしかったです。

### ●受験

面接試験を受け、みごと合格となりました。

企業に受験のお礼状を副担任と一緒に作成し送付しました。

### ●合格してから

まじめに勤めるように励ましました。

遅刻をせず、挨拶をすることや、言葉遣いに気をつけること、など具体的に説明をしました。

通勤に必要な、原動機付き自転車の免許取得のための練習もしました。

### ポイント

障害者枠のある企業を探し、受験できることになったとき、全職員が分担し協力して事前指導を行い、多面的に生徒を支えました。本人も地元の企業に就職するための練習をしっかりとやろうと、納得して頑張れたことがよかったです。また、保護者や本人との信頼関係を普段からきちんと作っていくことが大切だと思いました。就職活動にあたって、知的障害枠での募集企業がほとんどないことは今後の課題だと思っています。療育手帳を取得しての就職活動については、地域の支援センターや、ハローワークとのさらなる連携が大切だと考えています。

# 就労支援の実際

## ～インターンシップによる就労支援～

障害者就業・生活支援センターでは様々な障害のある方々の就労支援を行っています。平成18年頃から、高校を卒業したけれどなかなか就職できない、といった悩みを持つ家族の相談が目立つようになりました。

どのような支援が有効であるか悩む中、他県ではインターンシップを通じて企業就労へ結び付ける事業を行っており、よい結果を出していることを知り、本年当センターでも行うことにしました。

### ●インターンシップの取組

- ・高校在学中の発達障害もしくはその疑いのある生徒を対象に、提携先企業内での就労体験を行う。
- ・事前の聞き取りと事後の聞き取りを行い、自己理解を深め、卒業後の進路の決定に役立てる。

### ●インターンシップの実際

特別支援学校の職員、地元大学教育学部の学生及び、障害者就業・生活支援センターの職員が支援者として参加し、生徒は所属高校の推薦を条件に定員10人で募集しました。問い合わせは多数ありましたが、最終的には公立及び私立高校と専門学校より3人の応募がありました。

問い合わせのあった中には、保護者や学校関係者の勧めにもかかわらず、本人が納得しなかったために応募できなかったケースがありました。今回この企画に参加した3人は、いずれも本人の自己理解があり、これまで保護者や教師との信頼関係により適切な支援が受けられてきた生徒でした。

インターンシップの進め方ですが、初日午前中に支援者へ「支援のあり方・考え方」の説明を行い、午後応募生徒に対して聞き取りと、カリキュラムについて説明をしました。

2日目から、生徒には、特別養護老人ホームでの清掃、介護補助などの業務を体験してもらい、1日ごとに振り返りを行いました。

最後に、全体を通しての振り返りを個別に行いました。

(障害者就業・生活支援センターについてはP88参照)

### ●事例から

#### 希望者

普通高校3年生(男子)で、ADHDの診断がある。

#### 応募のきっかけ

インターンシップの案内を見て特別支援教育コーディネーター、担任の推薦を得て応募した。

#### 学校推薦理由

本校に慣れてからは薬の服用もなくなったが、(中略)本人の特徴を理解した職員の支援で学習課題に取り組んでいるものの、達成が厳しい。初めての場面に弱く、頭痛・パニック・脳貧血等の二次障害、不注意による事故も多いことから、就労にも、彼だけの特別プログラムが必要であると感じている。

#### 学校での得意なこと苦手なこと

説明すれば分かる。はっきりとした指示は守ることができる。指示待ちになってしまい、自分からやるべき行動をとれない。やる気はある。自分で好きなことは、人に聞きながら進んで行動するし、機敏に動く。

#### 家庭での様子

部屋の整理整頓が出来ない。金銭管理が苦手なゲームや漫画に熱中しやすく無駄遣いをしてしまう。

#### 家庭で困っていること

一人暮らしや自立に向けて不安がある。臨機応変さに欠ける。仕事に就いて欲しい。

### インターンシップの体験

実習場所：特別養護老人ホーム

実習内容：館内清掃，シーツ交換，リネン整理など

職場で実習を4日間，就業支援ワーカー1人，特別支援学校教員1人，及び地元大学教育学部学生2人が支援に入る。

支援者の役割分担

就業支援ワーカー：現場での作業指導

特別支援学校の職員：作業の場面での対象者の様子を確認

地元大学の学生：対象者に対し体験をサポート

実習での様子

初日：だいぶ不安があるせいか，集合場所で虚勢を張るなどした。

作業中も興味のあることは集中してできている。興味のないことは作業が持続できない。

2日目：だいぶ慣れてきている。会話を楽しみながら作業に取り組んでいる。

3日目：体調不良を訴え，少し休憩を入れたが，本人から自分で決めた時間までは作業を行うとのことで，最後までやり通すことができた。

4日目：ムラはあるが時間内は何とかやり通すことができた。

### 終了後本人から

体調不良で苦しいときもあったが，最後までやり通すことができて自信になった。作業も簡単なことばかりではなく，自分自身の得意なところ，苦手なところも分かった。

この結果を基に，所属高校で，本人，母，担任，特別支援教育コーディネーター，養護教諭及び障害者就業・生活支援センターの職員で支援会議を行いました。

本人にはインターンシップ時の評価について「好きなこと，難しい道具を使う作業は熱心に行うことができる。優しさがある。心配りがある。でも集中が続かなかった時もあったね。体調が悪くても自分で決めた時間まで作業ができた。」と伝えました。保護者より将来についてどう考えたらよいかと質問があり，卒業後すぐに就職というよりも，技術を身につける方法として，技術専門校への進学を紹介しました。本人から見学したいとの申し出があり，技術専門校と調整の上，後日見学することになりました。また，インターンシップをさらに違った職種で体験したいとの申し出もあり，スーパーの店員の体験を地元でできるよう障害者就業・生活支援センターで調整をすることにしました。

### 学校から

インターンシップを通じて自己理解が進んだ様子で，将来についても見通しがつきありがたかった。また，地域の関係者とのネットワークもでき，学校だけで悩まなくてもよいと考えることができてよかった。

### キーポイント

インターンシップによって本人の自己理解が進むのはなぜでしょうか。

それは，日ごろから保護者や教師が，本人に自信が持てるようにかかわってきたからです。何よりもこのことが基本にあり，インターンシップもその上に成り立っている事業であると思います。

もちろん，インターンシップの企画の存在やその内容も重要ですが，支援者が，本人のためにと企画を紹介しても本人が拒否する事例がみられます。今回紹介した事例のように，インターンシップの取組がうまくいったのは，支援者が，長所や短所を含めた自己理解が進むように，適切な内容や方法による評価を日常的に積み重ねているからです。

今後は学校だけではない，地域のいろいろな社会資源を活用できるネットワークが必要であると考えますが，そういった仕組みを生かせるかどうかは，支援者自身の普段の関係づくりにかかっていることを忘れてはなりません。

# 体験を通して決めた高校進学

～中学校と高校とで連携をしながら進めた進路指導～

特別支援学級に在籍するAさんは、職場体験学習を行ったり、いくつかの高校について調べたり、特別支援学校を見学したりもしましたが、なかなか自分に合った進路を見つけることができずにいました。Aさんは引き続き、学校見学や体験入学を重ね、自分の進路について少しずつ具体的にしていき、希望の進路を決定しました。さらに進学先の高校へ、中学校での支援内容を伝えたことで高校生活をスムーズにスタートすることができた事例です。

## ●自分の進路についてなかなかイメージが持てずにいる中学2年生のAさん

将来はスーパーやコンビニで働きたいんだけど、どうすればいいのかなあ。

人がたくさんいるところは苦手だな。少ない人数だと集中できるんだけど…。

Aさんの希望を叶えるためには、どのような進路がよいのだろう。そのために今できることは何だろう。

勉強はあまり得意じゃないんだ。できれば、あまりやりたくないなあ。



Aさん

特別支援学校を見学したけど、ぼくには合っていないような気がするなあ。



担任

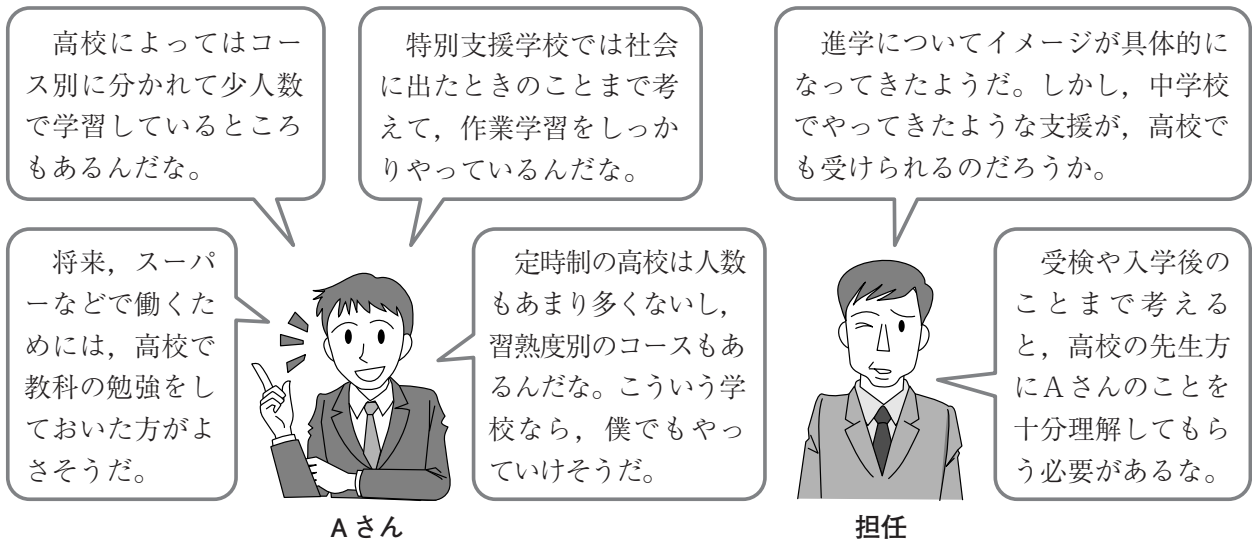
将来について漠然としたイメージはあるものの、それが自分の進路となかなか結びつかないAさん。まず、はじめにAさんの希望や不安な点を整理し、今後の進路学習の方向を考えました。進路指導の担当者とも相談し、学校見学や体験入学を積極的に取り入れ、高校や特別支援学校についてより具体的なイメージがもてるように進路学習を進めました。

## ●学校見学や体験入学を行って（2年生～3年生）

時期	学校	内容
2年生2月	A特別支援学校 高等部	・教育相談と学校見学をしました。
3年生4月	《家庭訪問》 ※保護者とともに2年時に行った進路学習を振り返り、将来の希望や進路先について話し合いました。今年度は学校見学や体験入学を行いながら具体的なイメージがもてるように支援していくことを共通理解しました。	
3年生7月	B高校（公立 全日制）	・体験入学に参加しました。
	C高校（私立 全日制）	・学校見学会に参加しました。
	A特別支援学校 分教室	・教育相談と学校見学をしました。
3年生8月	《三者懇談会》 ※今まで行った学校見学や体験入学から特別支援学校よりも高校の方が合っていると自分で判断することができました。保護者と担任も本人の希望に寄り添いながら支援していくことを確認しました。	
3年生9月	D高校（公立 定時制）	・文化祭を見学。その後、教育相談をしました。
	E高校（公立 定時制）	・体験入学に参加しました。
3年生1月	C高校（私立 全日制）	・入試相談会に参加しました。



学校見学や体験入学の際にはできるだけ担任が引率するようにし、直接Aさんの様子を見るとともに各学校の入試担当者や特別支援教育コーディネーターとAさんについて話す機会を持ちました。



いくつかの学校見学や体験学習を通して、それぞれの学校のことをより具体的に理解し、その先の進路のことも少しずつ見えてきました。Aさんは少人数で自分のペースで授業が受けられるのなら、学習についていくことができそうだと判断し、コース別の授業があるC高校（私立 全日制）とE高校（公立 定時制）の2校を受検することに決めました。

### ●高校の受検に向けて

Aさんの進路希望がはっきりしたところで、担任はAさんの実態や特別支援学級での授業の様子について高校の先生方に十分理解してもらう必要があると感じました。そこで、保護者の承諾を得た上で、教頭や進路指導主事と連携をとりながら、情報交換をする機会を設けました。

時期	学校	内容
1 2 月	C高校 (私立 全日制)	・担任がC高校を訪問し、入試担当者にAさんの障害の状況や特別支援学級での授業の様子などについて口頭で伝えました。また、受検に向けての配慮点について確認しました。
2 月	C高校 (私立 全日制)	・一般入試の出願をするときに、調査書とは別にAさんについてまとめた「生徒資料」(資料1)を作成し、C高校に送りました。
	E高校 (公立 定時制)	・後期選抜の出願後、中高の教頭同士で連絡をとり合い、その後、担任が直接、E高校の教頭にAさんの障害の状況や特別支援学級での授業の様子などについて伝えました。
3 月	E高校 (公立 定時制)	・合格発表後、中学校で連絡会を行い、「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」をもとに、Aさんの実態や学校での生活の様子、配慮事項などについて確認しました。内容は「生徒資料」(資料1)参照

Aさんが集団に対して抵抗感があることや特別支援学級で学習した内容など調査書に書ききれない部分を受検前に高校に説明することができ、受検当日も様々な点で配慮してもらうことができました。特にC高校では集団に対する抵抗感があるということに配慮してもらい、安心して受検できるようにと別室を用意してもらいました。

その後、Aさんは無事E高校に合格し、進学することに決めました。3月下旬には中学校で連絡会を行い、E高校で直接担当する担任にAさんのことを詳しく伝えました。それをもとにE高校ではAさんに対する支援体制を整え、Aさんもスムーズに高校生活をスタートさせることができました。

## 【資料1】 生徒資料

200〇年〇月〇日 作成

ふりがな 生徒氏名		〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇 〇〇	(男) 女	学校名	〇〇〇立〇〇中学校	
在籍学級			〇〇組 (〇〇障害特別支援学級)	担任氏名		〇〇〇〇
日常生活の様子	健康面	・病気やケガなどをすることがあまりなく、身体面での問題は特にはない。ただ、精神的なストレスを感じているときには、腹痛や頭痛などを訴え、体調を崩してしまうことがあった。				
	性格	・自分に自信が持てず、常に人からどのように見られているのかを気にしながら生活している。				
	対人関係	・集団の中にいることはできるが、集団の中で意見を言ったり、発表したりすることについて苦手意識を持っている。				
	出席状況	・1, 2年時は学校を欠席することはほとんどなかった(1年時に〇日, 2年時に〇日)。3年生の2学期に学習発表会や音楽会など、人前で発表するような行事が続いたことが原因で精神的に不安定になり、学校に来られない時期があった(12月末日までで〇日)。				
特別支援学級での学習の様子	国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学1, 2年生の教科書にある現代文を中心に学習した。何度も繰り返し読み、キーワードとなる言葉を手がかりに内容を把握していくことができた。</li> <li>・漢字の読みについては小学校高学年程度、書き取りについては小学校低学年程度の力がある。授業中、教科書に出ている漢字を1つずつ確認し、ノートに書き取って練習したが、とても集中して前向きに取り組む様子が見られた。</li> </ul>				
	数学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学1年生の計算問題を中心に学習した。正負の計算については概ね理解し、符号の意味を考えながら正確に問題を解いていくことができた。</li> <li>・文字式については基礎的な部分を理解し、単純な四則計算であればほとんど間違えることなく問題を解くことができた。ただ、括弧や分数を含んだ式については多少混乱しているような姿も見られた。</li> </ul>				
	英語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主に中学1年の教科書にあるb e動詞と一般動詞について学習した。一般動詞の学習ではカルタやビンゴゲームをしながら、基本的な単語について意味と読み方を覚えることができた。</li> <li>・日常生活の中で使う数字や値段、時間、天気などについて、英語で表す学習に取り組み、基本的な単語については英語で発音できるようになった。</li> </ul>				
	作業学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・良好な人間関係を築くための基礎を身につけるために、製作活動や販売活動を行った。人前に出る抵抗感があるため、販売活動に参加することはあまりなかったが、製作活動では材料の重さを正確に量ったり、製品の質を意識して丁寧に袋につめたりすることができた。</li> </ul>				

### ポイント

- 学校調べや職場体験学習などを行っていても、将来についてすぐに具体的なイメージを持つことは難しいものです。学校見学や体験入学などをできるだけ早い時期から行うようにし、段階をふまえながら回数を重ねていくことが大切です。(特別支援教育シリーズ第1集参照)
- 高校での生活やその先のことまで考えて進路を決定することがとても重要です。そのためにも中学校と高校との連携を密にし、入試の前から情報交換を行い、入学前には「個別的教育支援計画」や「プレ支援シート」などを活用しながら、支援体制を確認することが大切です。(プレ支援シートはP91, 92および、特別支援教育シリーズ第2集参照)